

Interregional Relationships in Southern Peru : Maritime Activities of Highlanders in Three Southern Departments of Arequipa, Moquegua and Tacna

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増田, 昭三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004530

ペルー南部における海岸と高地の交流

増 田 昭 三*

Interregional Relationships in Southern Peru: Maritime Activities of
Highlanders in Three Southern Departments of Arequipa,
Moquegua and Tacna

Shozo MASUDA

One of the remarkable characteristics of Central Andean culture is the way in which diverse ecological zones are controlled vertically by various social groups, thus leading to the formation of effective interregional mechanisms of social and political control. This concept of “vertical control” has been discussed by ethnologists and historians since it was first advanced by John V. Murra.

Vertical control implies not only the maximum utilization of different ecological zones by agrarian producers, but also barter and trade among regions. In the Central Andes pastoralists apparently played a major role in the latter aspect. An ethnological investigation conducted by the author in 1978 revealed that the traditional way of bartering among pastoralists and peasants is still practiced in some parts of Southern Peru, despite the recent penetration of the market economy into the region.

However, more significant in terms of interregional contact is the activities of the highlanders of Arequipa, Puno, Ayacucho and similar places, in the coastal areas of Southern Peru. Those highland people, mostly with agricultural backgrounds, descend en masse from their homelands during certain times of the year to work as day laborers in such rice-producing regions as Ocoña, Camaná-Majes, Quilca, as well as to engage in *macha* and *camaron* hunting. The bulk of aquatic products are transported to the large cities, but some are dried and taken to highland villages by merchants and pastoralists.

Particularly interesting is the collection of a seaweed (known locally *cochayuyo*) by those highlanders who seasonally come down

* 東京大学教授・国立民族学博物館併任教授

to the coast. From Lomas of Ica Department to Atico and beyond, temporary settlements of the *cochayuyeros* appear each year between August and December. The seaweed is dried and sold to merchants or bartered with jerked meat of llamas which pastoralists bring, and is circulated quite extensively throughout the highland. It is significant that what is called *cochayuyo* in the south is of the genus *Porphyra*, whereas in the north is of the genus *Gigartina*.

Another kind of *cochayuyo* is obtained from freshwater. It has several local names, such as *cushuro* and *murmunta*, and is also favored by the highlanders.

There is a recent and growing interest among archaeologists in the "maritime foundation of Andean civilization". But the importance of maritime products must be emphasized also in the context of contemporary ethnography. Clearly, marine activity can be regarded as one of the important items of "vertical control" practiced by the highland people of the Central Andes.

I. 研究の前提	2. 調査の発端
1. 文化領域としての中央アンデスの特質	3. 高地民と海岸地方
2. 戦略的仮説概念としての‘垂直統御’	4. 高地民の海岸低地におよぶ商業活動と出かせぎ
3. 方法をめぐって	5. 高地民の海岸地方における漁撈活動(1)
4. ペルー南部における1978年度の民族学調査	6. コチャユエヨとクシュロ
II. ペルー南部における海岸と高地の交流	7. 高地民の海岸地方における漁撈活動(2)
1. ペルー南部海岸地方の地理学的特徴	8. 高原の牧民と海岸地方

I. 研究の前提

1. 文化領域としての中央アンデスの特質

中央アンデスは、周知のように比較的幅狭い経度間に、はげしい高度差その他の因子によって生ずる自然環境の大きな差異が存在し、そのため人間の適応と文化形成の様式が、地域ごとに大きな多様性を示しているのが特色である。このような中央アンデスの生態学的条件と地域文化の多彩な様相は、古くから多くの学者によって論ぜられ、さまざまな分類基準がこれに適用されてきた。常識的な次元でも、海岸・山地・モンタニャ *costa, sierra, montaña* の三区分は中央アンデスの住民の思考の前提に置

かれており、また局地的には各地域の住民によって、さらにこまかい分類が日常生活や生業活動において用いられている(本号大貫論文参照)。そして、専門の学者の分類としては、プルガル・ビダル [PULGAR VIDAL 1946]、トシ [TOSI 1960]、トロル [TROLL 1958] 等による分類がとくに有名である。いずれにせよ、環境の多様性とそれに対応する人間の適応の多様性とは、自明の理なのである。

ところが反面、中央アンデスにおいては、全地域を一貫した文化的統一性というものが、たしかにあるように感ぜられる。人間の生活様式、習俗、言語、思考形式、価値観、世界観、民話、伝承など多くの側面にわたって、中央アンデスの住民は基本的要素を共有し、同一構造の文化の型が、地域間における生業、経済的適応の多様性にもかかわらず厳然として存在しているように思われるのである。そもそも中央アンデスという地域概念は、同時に文化領域概念でもあって、その等質的文化的特徴は、その地域の人々にとって、これまた自明の理であると言える。多様性にもかかわらず存在する統一性、また統一性にもかかわらずその内部に認めなくてはならない多様性は、中央アンデスの本質的な生態=文化的特質の構造の二面を示すものであり、もし中央アンデスの文化形成および文化的特徴をとらえようとするとき、そのようなふたつの面のいずれをも無視しないで現象の分析をおこなわないかぎり、その本質的な文化構造は理解しえないであろう。

以上のような見地から見ると、従来の中央アンデスの文化の民族学的研究には、大きな欠陥があったように思われる。民族学の研究が、社会全体の動態や機能構造よりも、規模の小さい地域社会の直接観察に基礎をおく以上当然と言えるかもしれないが、これまで中央アンデスでおこなわれてきた研究は、同地域の生態学的条件や文化的適応の多様な諸相の一カスに集中するあまり、文化の全体的統一性と研究の対象になった特定社会の結びつきについて考察されることがほとんどなかった。そしてその反面、中央アンデスに文化的統一が存在することは、当然事として前提され、その統一性の具体相や構造について論ぜられることは、ほとんどなかったのである。この点で、キルヒホッフが規定して以来、多くの民族学者によって考察の対象とされ、きたえられてきたメソアメリカ *Mesoamérica* という概念にくらべて、中央アンデスという文化領域概念の内容規定は、はなはだ漠然としていたと言わなくてはならない [KIRCHHOFF 1952]。

多様性ある統一とは、中央アンデスに限らず、他の文化圏においてもありうる特性である。たとえば、地中海世界の文化とか、東アジアの文化などにも、そのような性格がたしかに認められると言ってよい。しかし文化領域としての中央アンデスを特色

づけるものは、その多様な相の間に見られる振幅の大きさであり、またそれにもかかわらず成立している文化的等質性、共通性の異常なる強さである。地中海世界の場合は、あくまで地中海という共通媒体があって、多様な諸地域の統一性が生れたのであった。しかもその共通媒体は、ただ単に交流や伝達の中だちをただけでなく、「地中海性気候」と地理学上言われる風土の共通項をさし出して、各地域における相似した自然条件の併存を可能にしたのであった。東アジアの場合には、それとはおのずと条件がことなるのは当然であったが、環黄海、環東シナ海の文化圏の形成や、中国を中心とした東アジアの政治的統一、および、いわゆる照葉樹林帯と呼ばれる自然条件の普遍、などによって、文化的斉一性が成り立つ構造契機は十分に存在していたと言っている。ところが中央アンデスの場合には、たとえばプルガル・ビダル分類によっても、チャラ Chala, ユンガ Yunga, ケチュア Quechua, スニ Suni, プナス Punas, ハンカス Jancas, ルパ=ルパ Rupa=Rupa, アマソニア Amazonía の少なくとも8つの気候帯が峻別され、そのそれぞれが、たがいにきわだってことになった特徴を賦与されているのである [PULGAR VIDAL 1946: Introducción]。このように大きくへだたった自然条件の間に、文化的統一があらわれたのはなぜであったか。この問題の考察には少なからぬ困難がともなっている。なぜならば、各地域間の差異と多様性を強調すれば全体の統一性は薄れ、逆に普遍的均質性に焦点を合わせると、全体を構成する個の特質と独自性がどうしてもおろそかになってしまうからである。

2. 戦略的仮説概念としての‘垂直統御’

以上述べた、中央アンデスの多様性の統一を説明する有効な原理として、最近唱えられるようになってきたのが、いわゆる‘垂直統御’ vertical control の概念である [大貫 1978a]。これは、1562年のワヌコ文書 [ORTIZ DE ZUÑIGA 1967-1972] の民族誌資料の利用を考察する際に、アメリカの人類学者ジョン・ムラが提唱したものであり [MURRA 1972]、その後、中央アンデスの文化的諸現象を理解する上で、きわめて有効な概念として多くの学者によって論ぜられている [FLORES OCHOA 1978; FORMAN 1978]。

垂直統御とは、中央アンデスにおける、4,000メートル以上の標高差によって生ずることになった自然環境の資源を最大限に利用して有効なエコシステムを操る、政治・経済・社会体系の運用を総称する概念である。ムラ自身の表現によれば、それは「生態学的階床の最大限の垂直統御」 el control vertical de un máximo de pisos ecológicos であり、また「垂直的列島の同時的統御」 el control simultáneo de “archipiélagos

verticales” [MURRA 1975: 60] とも表現されている。ムラはいわゆるインカ・ホライズン、または後古典期から植民地時代初期にいたる中央アンデス各地の社会的統合を説明するとき、その生態学的、経済学的基礎にあるものとしてこの概念を提示したわけだが、同時に彼はこの概念が、対象社会の大小の別にかかわらず有効であり、またインカ・ホライズン以前の先史時代にたいしても、現在の民族誌分析においても適用可能であると唱えた [MURRA 1975: 61]。要するに垂直統御とは、中央アンデスの自然条件とそれに対応する生態学的階床の多様性そのものを積極的に開発することによって、生活体系を政治・社会・経済等のレベルにおいて統一的に編成する人間の努力を意味し、したがって主体的な人間存在の表現としてとらえることも可能であって、多様な自然環境が主体的な空間構造へと統一化されて行く過程においてはたらく原理と考えてもさしつかえないものである。そこで垂直統御という概念の中には、多様と統一の関連がアプリオリに内含されており、われわれが最初に略述した中央アンデスの特色的な文化構造を分析するうえに、きわめて大きな戦略的意義を持つものと考えられる。

しかしながら、ムラの言う垂直統御の概念には、多分にあいまいな側面も含まれている。極端な高度差から生ずる「きわめて差の大きい環境下にある生態学的な“島々”の同時的統御」が、同一の社会単位によっておこなわれることは具体的事例によって示されているとは言うものの、そのような統御の営為が、どのようにしてそれに対応する社会システムを作りだして行くかという過程の説明が、ほとんどなされていないのである。そこで、ムラが具体的事例としてあげているチャウピワランカ Chaupiwaranqa のような2,500~3,000世帯でいどの村落と、ティティカカ湖畔のルパカ Lupaqa のような2万をこす世帯より成る首長制社会の差が、垂直統御の量的拡大として生ずるのか、またはどこかの段階で質的な転換がおこってことになった次元の社会統合が可能になるのかがまったくあきらかにされていない。いわんやタワンティンスーユ Tawantinsuyu のような全中央アンデスにまたがる政治システムをムラ流に説明しようとするとき、仮にそれを複数の垂直統御システムの統一と理解してみたところで、それではそのような統一を可能にした全体的なメカニズムはどのようなものであったか、という疑問があらたに生じて来ざるを得ないのである。結局、垂直統御という概念は、中央アンデスの複雑な現実を分析するために、有効な仮説的概念ではあるにせよ、その内容の厳密な規定がまだまだ不十分であることを認識してかからねばならないのである。

3. 方法をめぐって

それではわれわれは、どのようにしたら中央アンデスの、背反的な側面をかかえこんだ文化構造をあきらかにすることができるであろうか。

1) まず個別的な地域社会をとりあげ、その文化内容を詳細に観察して、中央アンデス社会に関して基礎的な情報を得ることが必要であろう。この場合、従来のコミュニティ・スタディのように、全体との関連についてあまり顧慮せずに調査するのではなく、たえず汎中央アンデス的な普遍価値体系の存在をかたわらに意識しながら、そのコミュニティの社会組織、経済生産、政治体系、儀礼、宗教、等について資料を集め、どの要素が汎中央アンデス的で、どの要素が地域的特殊的であるかを識別するように努める必要がある。と言っても、この方法で中央アンデスのすべてのコミュニティを調査することは事実上不可能なのであるから、ことなつた自然条件下にあるいくつかのコミュニティを選択し、それらの間の比較をおこなうことが有効であろう。

2) つぎに、全中央アンデスの地域社会をつらぬいて、均質性、等価性などを生ぜしむるに至つたと考えられる、コミュニケーションと交流の体系について具体的な調査をおこなうことが必要であろう。ここで、ムラの「垂直統御」の概念が有効性を発揮するはずである。「垂直統御」の実態を観察するにあたっては

- a. 生産における垂直統御
- b. 生産物の分配、流通、循環

のふたつの側面を区別し、それぞれの次元において広域にわたる人間活動が、人間間およびコミュニティ間にどのような接触や交換をみちびきだすかを記録しなくてはならない。

生産における垂直統御は、しばしば多くの人間集団間に接触を生ぜしめる。ブラッシュは、垂直統御を、圧縮型 Compressed type、列島型 Archipelago type および拡散型 Extended type の三つに分類しているが [BRUSH 1977: 10-16]、とくに拡散型の垂直統御の場合に人間集団間の接触と交流は多いだろう [GADE 1975: 51-54]。ブラッシュの類型論は、ムラの垂直統御説が出て以来はじめておこなわれた分類であり、今後具体的事例にそくして検討する必要がある。

圧縮型は、比較的限定された急傾斜の地域内に自然区分の階床 piso が連続して存在し、それが一世帯ないしは数世帯、ないしはひとつのコミュニティによって統御されるケースであり、現在の中央アンデスにおいてもっとも多く見られる型である。その性質上自己限定的で、集団間の接触や交流という点から見ると重要性はうすい。し

かし、圧縮型統御をおこなう農民が、プナ面において隣接するリヤマ、アルパカの遊牧民と生産においてある契約をむすび、自己の所有する家畜の飼育を彼らに委託することは、友枝啓泰によるアプリマック Apurímac 県カライバンバ Caraybamba の調査や、佐藤信行、山本紀夫によるクスコ Cuzco 県マルカパタ Marcapata の調査においてもあきらかにされている。したがってそこには、ことなつた社会集団間の交換が生じていることになる。

列島型は、利用される土地が遠くはなれ、本来のコミュニティのセンターから飛び地として統御される型である。もともとムラが16世紀文書によってあきらかにしたティティカカ地方のルパカ族、ワスコ Huánuco 地方のチュパチュ Chupachu 族がそのような垂直統御をおこなっていたが、ブラッシュは現在の例としてパーチャド Burchard, フォンセカ Fonseca, マイエル Mayer などが、パスコ Pasco, ワスコ両県で調査した諸農村や、アンカシュ Ancash 県のラパヤン Rapayán などをあげている [BRUSH 1977: 11-12]。すなわち、ジャガイモ、トムロコシなどアンデス的な生産物に依存する地域のコミュニティが、モンタニャ地方に数日ないし十数日かけて移動をおこない、飛び地で耕作をおこなうのである。しかし、列島型垂直統御は、ブラッシュがあげているような、農民コミュニティの飛び地耕作だけに限られるものではないことは、われわれの中央アンデス南部の調査があきらかにしているとおりである (後述Ⅱ-5. 以下参照)。

つぎに、生産物の交換、流通を通じての垂直統御の問題にうつるが、これはさまざまな社会集団間の交流・接触を見るために、生産における垂直統御よりさらに大きな重要性を持っていると考えられる。この問題は、もっぱら生産様式のみ焦點をあてたブラッシュの類型論にははいつてこず、大貫良夫はその点を批判して、垂直統御に第4の型、すなわち專業型 Specialized type を追加している。それは「異なるエスニック・グループが、それぞれ異なる環境を、いわば專業的に開発し、産物を交換しあうタイプ」と規定されている [大貫 1978a: 729]。大貫によれば、拡散型においても、異なる環境の産物を交換することは認められるが、それは「ひとつの谷を占める同一エスニック・グループ間で成立するもの」として、專業型とは区別されている。たしかに大貫が生産物の交換と循環に注目したことは意義があるが、これも事例に則して見た場合、さらに細密な規定や細分が必要であるように思われる (後述Ⅱ-5. 参照)。

さて、生産や交換を通じて、広域にわたる諸社会集団の間に接触や社会関係ができあがったとすると、それを基礎として他の次元でもさまざまな関係が成り立って行くことが期待できる。たとえば婚姻関係、宗教観念の共有と儀式への参加、情報の交換、

共通的な社会・自然カテゴリーの承認、などが進行し、べつべつの自然環境に住む者たちが、個々の社会を孤立した切りはなされたものとして見ないで、価値とシンボルの体系を持つひとつのより大きな世界の部分として意識することが可能になるだろう。ひとたび観念の共有が成立すれば、集団間の接触が維持されることによってたえず新しい観念が生まれ、伝達され、またそうすることによってそのような観念をわかち持つ者たちの内面的世界の構成はますます強固になってゆくだろう。以上述べたようなことがらを具体的に調査すれば、中央アンデスの文化の多様な相をつらぬく文化的統一の実体はおのずとあきらかになってゆくであろう。

3) 以上の考察においては、垂直統御を、主体的な人間の空間利用の様式としてひたすら記述してきた。しかし、人間存在の構造をただ単に空間性としてのみとらえようとすることは一面的であろう。垂直統御が、バラバラの個々の人間の営みではなく、人間がさまざまな結合や協同関係をかたちづくることによって生れる社会的行為であるとするならば、そこには空間性と時間性が表裏一体となった構造が作られ、社会的構造の時間性が、主体的人間の空間構造を通じて展開する結果、歴史が形成されるはずである。そうした時間性、歴史性を捨象した議論は、主体的な人間の生活形成の原理、すなわち文化形成の原理としての垂直統御の本質的な機能と作用について、皮相的な理解しか与えないであろう。中央アンデスの人間の垂直統御の努力は、現在という切断面で個々の人間が主体的に維持する環境利用の様式であるだけではない。それは長い歴史的な過程において中央アンデスの人間が身につけた社会的行動様式であり、自己了解の方法であり、対象としての自然を把握し理解するカテゴリーである。

ムラの垂直統御論においてもっとも欠けていたのは、まさしくそのような時間構造の考察であった。垂直統御が、単なる環境適応の様式としてだけでなく、社会システム形成の重要な条件として考えられただけに、それは致命的な欠陥だったとも言える。言いかえると、チュパチュアルパカやタウンティンスーユの社会システムが、垂直統御の体系にどのように呼応して形成されるのかという説明がムラにおいてほとんどなされていないのは、歴史史料を用いながら、社会存在の空間性の説明に終始し、時間的構造を無視した結果であった。垂直統御が成り立つことによって可能になる統一的な社会システムとは、一定の文化と社会の構成を内包した人間の有機的な結合体である。したがってそのようなシステムの内容の分析は、地域の多様を超えた普遍的価値の体系をあきらかにすると考えられ、中央アンデスの自然的環境の多様性と文化的統一の両面をそなえた構造の分析という、はじめにわれわれがかかげた研究目的のためにも大いに意味があるだろう。文化人類学、民族学の研究が、しばしば文化の時

間構造や歴史性を回避して手抜き作業をやり、平板な民族誌資料解釈に走る傾向があるのを反省しながら、中央アンデス各地に蓄積された豊富な地方文書を手がかりとして、垂直統御、地域間交換、交流、人間集団間の接触、物質と観念との循環と共有などを、歴史的に考察することが必要であろう。

4. ペルー南部における1978年度の民族学調査

東京大学、財団法人リトル・ワールド、国立民族学博物館、広島大学の研究スタッフが、協同で1978年7月から1979年3月までおこなった「中央アンデス農牧社会の民族学的研究——海岸・高地・熱帯低地地域間の動態的社会関係」*は、3.に述べた研究方法にもとづき、1.に略述された中央アンデス社会の文化的特徴を分析説明するためにおこなわれたものである。上記3.の1)の方向の研究対象としては、アプリマック県とクスコ県のふたつのコミュニティが選ばれ、佐藤信行、山本紀夫が調査をおこない、一部藤井竜彦が参加した。前者におけるカライバンバ、後者におけるマルカパタは、いずれも典型的な垂直統御をおこなうコミュニティであり、生産の実態とともに、社会組織、儀礼、シンボル体系などに関して多くの資料が得られた。同じ時期に文部省在外研究員としてペルー滞在中の友枝啓泰は、カライバンバについて別の角度から調査をおこない、多くの教示を与えてくれた。また、とくにマルカパタで、エスノボタニーの専門家である山本紀夫が調査をおこない、高度差による農耕の区分と栽培植物の品種についての具体的研究をおこなったことは、作業仮説としての垂直統御論に実地の検証を試みた作業として大きな意義があった。

3.の2)の項目に関しては、上記カライバンバ、マルカパタでも情報は得られたが、中央アンデス南部海岸地方における漁撈、農耕、牧畜の三つの生業間の相関を見るため、増田昭三が、アカリ Acarí 川流域からペルー最南端のタクナ Tacna 地方にいたるまでのすべての河川流域の広域調査をおこなった。また、同地方の生態学的先史学的様相について、大貫良夫と藤井竜彦が調査をおこなった。

最後に3.の3)に関しては、アレキーパ Arequipa、モケグア Moquegua、タクナ三県の地方文書調査が、ペルー・カトリック大学のフランクリン・ピース Franklin Pease、ウィスコンシン大学のロランド・メジャフェ Rolando Mellafe、および増田昭三の手でおこなわれた。その結果、アレキーパ市、タクナ市の地方文書館、タクナ市のサン・ペドロ教会で多くの関係文書が得られたが、特筆すべきことは、モケグア市の公証人ビクトル・クティペ Víctor Cutipé 氏の自宅倉庫において、1586年から現

* 1978年度文部省科学研究費海外調査補助金（課題番号404312）による。

代にいたる膨大な公証人文書が調査できた事実である。元来モケグアは、海岸地方にありながら、高原のチュクィート Chucuito 地方と関係がふかく、1567年のチュクィート文書にも、ティティカカ湖南岸の首長たちが、同地方に飛び地を持って小麦やトウモロコシの耕作をおこない、列島型の垂直統御をおこなっていたことがあきらかにされている [DIEZ DE SAN MIGUEL 1964 (1567); MURRA 1968]。また植民地時代初期において、モケグアはチュクィートの管轄下にあったため、両地方間には絶えず連絡交通がおこなわれ、生産や交易において関係がひじょうにふかかった。クティペ氏蔵の文書にも、海岸と高地、さらにはアンデス東部低地間の接触と交流を示す多くの民族誌的資料が含まれていることが確認されたが、とりあえず17世紀はじめまでのすべての文書のマイクロフィルム化がおこなわれ、目下そのテキスト化と分析が進行中である。

1978—79年におこなわれた調査は、3. に述べた方法にもとづく中央アンデス調査の発端にすぎないが、調査期間中に得られた資料は、いずれも将来の研究の有望な展開を示唆しているので、今後引きつづき実地調査をおこなって、問題の解明に努力したいと参加者一同は考えている。

Ⅱ. ペルー南部における海岸と高地の交流

以下に述べるのは、1978—79年の調査のうち、増田が担当したペルー南部における海岸と高地の交流、とくにアレキパ、モケグア、タクナ三県における高地民の漁撈活動と交易に関する調査の報告である。

1. ペルー南部海岸地方の地理学的特徴

中央アンデスの南部は、中・北部とはちがう地理的特徴をそなえている。すなわち高地におけるアルティプラノの発達と、海岸地方における高い堆積台地の形成である。アルティプラノとは、東西コルディエラの中間の盆地帯をさし、比高数百メートルほどの残丘をもつ波浪状の隆起準平原であるが、とくにペルー、ボリビア地方の海拔4,000メートルていどの高度にある冷寒で自然の樹木にとほしい一種のステップ的景観をもつ高地は、プナ puna と呼ばれている [佐藤 1979: 13]。アルティプラノはペルー、ボリビア国境付近で最大の幅を示し、ティティカカ地方の大盆地を形成している。この地方は、むかしからリヤマ、アルパカ等ラクダ科の動物の飼育がさかんであった所で、農業においても、ジャガイモ、キノア、オカ、マシュア、オユコなどの

特色ある産物を開発している。ティティカカ湖以北になると、アルティプラノの幅はぐっと狭まり、その盆地床平原は、東側から侵入するアマゾン河系の河谷に開析されて平頂の狭い高原群に分れ、縦谷や盆地が発達するようになる（図1）。

海岸地方（太平洋岸）においては、西コルディエラの西に、狭い低地をはさんで低

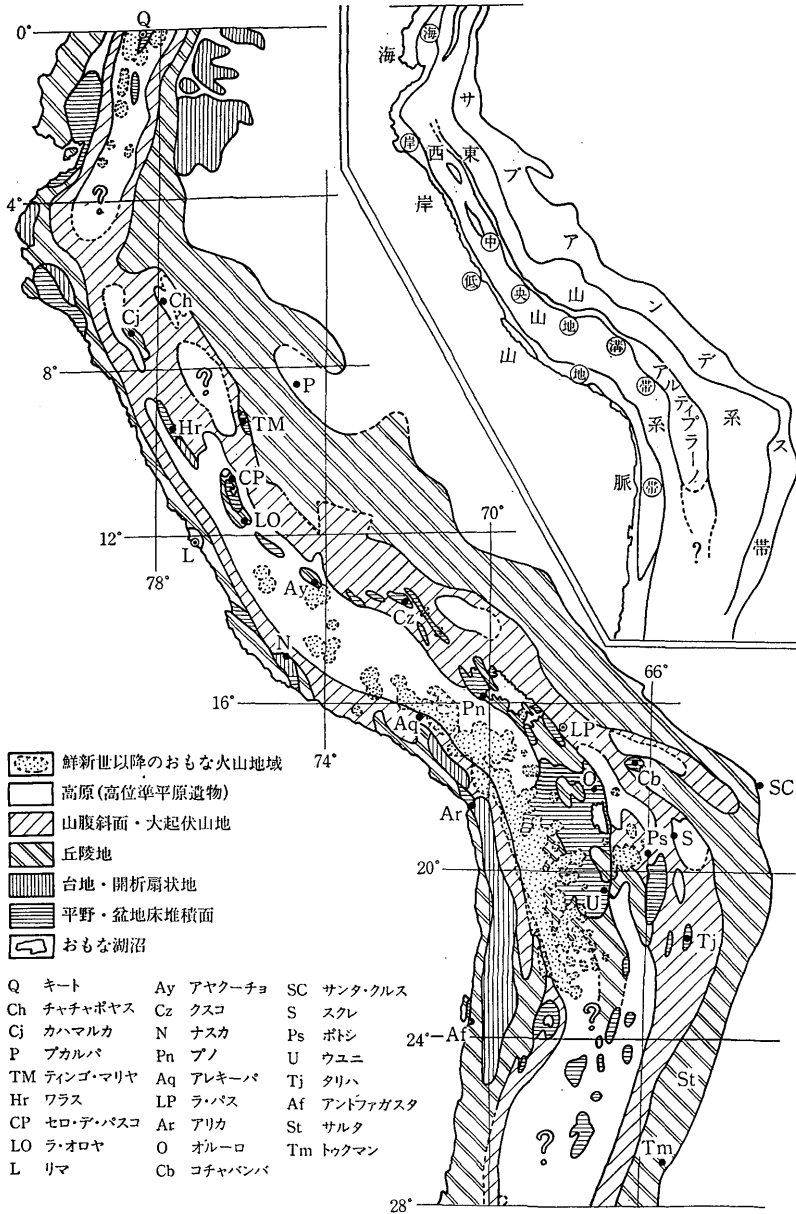


図1 中央アンデスの地域区分(右上)と地形分類(〔佐藤1979〕による)

い海岸山脈が走っている。ペルー北部においては、この低地帯が海に面した平野となり、海岸山脈は水中に没して大陸棚が発達している。それに反して南部においては、海岸山脈が西コルディエラと密着し、海岸にむかって傾斜する台地と化しているため、平野が存在する余地はほとんどない。また大陸棚は、北海岸に比べて急にその幅を減じている(図2)。

このような地形の差は、イカ川以北と以南の人間居住の様式に、大きなちがいを与えている。ペルー北部のランバイエケ川流域からイカ川流域までは、程度の差こそあれ海岸地方に発達した平野のオアシス地帯に古代から農耕がおこなわれて文明が発達し、それがアンデス高原に発達した数々の盆地の文化と呼応しながら、海岸と高地との関係が形成されて行ったのであった。そしてクスコ、アヤクチョ、ワンカヨなどの

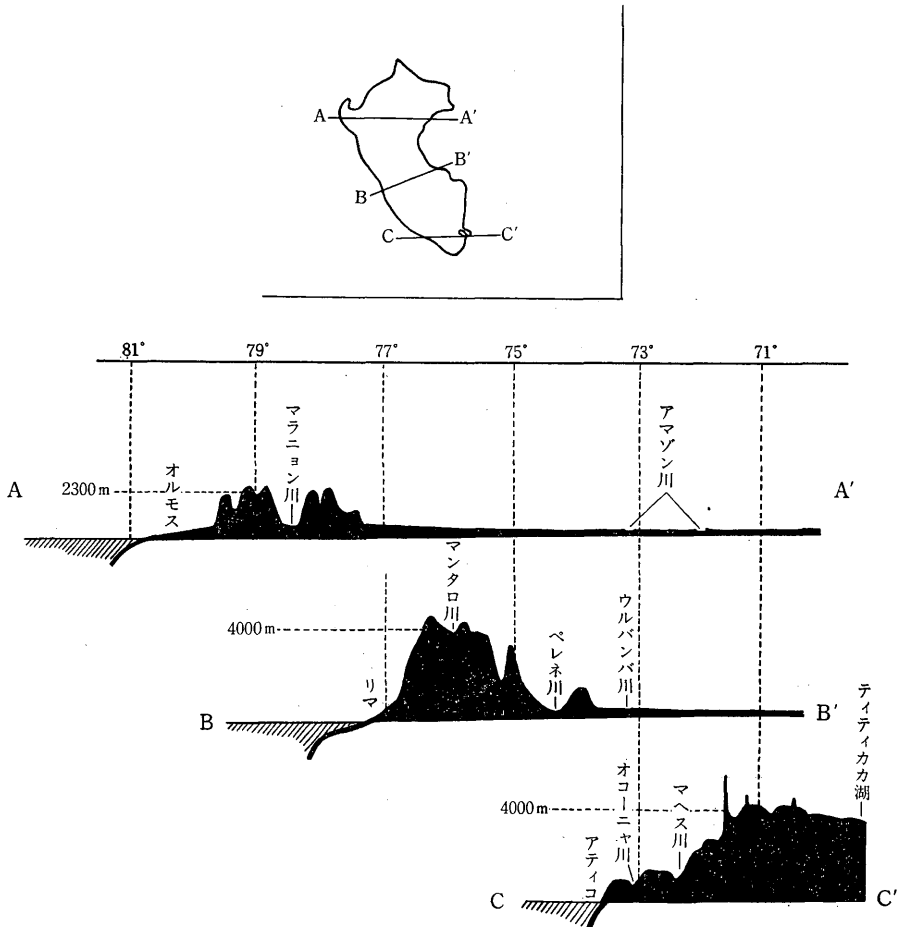


図2 ペルー断面図 (Ernesto Curril による)

高原盆地における農耕は、一方においてはプナにおけるラクダ科動物の飼育をおこなう牧畜民と関係を持ち、また他方においては、東側からアルティプラノの盆地床平原を開析する大河の流域の温暖なケチュア地帯の農業開発に支えられて、独自の型の文化を発達させることができた。イカの南のアレキパ県アカリ川以南、ペルー最南端のタクナまでの海岸地方においては、台地状の地形が海岸近くまで張り出し、急に海に落ちこんでいるため、海岸平野はほとんど発達せず、農耕はもっぱら狭い河谷の河岸平地でおこなわれるにすぎない。そして、背後にひかえるアンデス高地においても、広大なティティカカ盆地は海拔高度4,000メートル内外であって、孤立した内部流域をなしているため、ティティカカ以北におけるような大河川の侵入とケチュア地帯の発達が見られず、その内部で、リャマ、アルパカの飼育やジャガイモ、キノア等高度に適応した農産物の耕作をおこなって、それ自体が自立性の高い生産圏をかたちづけている。また、海岸地方との関係において見るならば、山地が極端に海岸線に迫ったかっこうになっているので高原の文化は、北・中部海岸におけるよりも、より海岸の住民に接近していると言えることができる。つまり、北・中部海岸においては、海岸文化が、広い平野部に発達した農業地帯の生産に支えられて大きな政治勢力を作り、高原の文化と対峙していたのになら、南ではそのような海岸文化の発達が見られず、高原の住民や文化が直接海岸に迫る、という勢いを示していたのである。

タクナ以南、チリ北部の情勢も、ペルー南海岸のそれとは、はっきりことなっている。チリ北部海岸においては、コキンボ Coquimbo 付近からペルーのタクナ付近まで、海拔1,000メートル前後の細長い縦谷が走り、盆地状の低地帯を作っている。これはアタカマ Atacama と呼ばれるひじょうに乾燥した砂漠地帯であり、西コルディエラからの雪どけ水も、盆地の東縁まで達してやがて末無川となる。したがって農耕可能な限界も山麓部に限定されている。一方高原では、ティティカカ盆地とつづくウユニ Uyuni 盆地が背景となるが、ここには海拔4,000メートルの高原に、ティティカカ湖の約2倍の大きさの大塩湖の干上がったウユニ塩荒原がひろがって農耕に適さず、周辺の草原地帯でリャマ等の牧畜がおこなわれるにすぎない。そこで、高原と海岸のダイナミックな相互作用を生むような強力な生産的要因は、この地域には見られないのである。

以上述べたように、ペルー南海岸地方は、北・中部海岸地方とも、チリ北部ともはっきりと区別される自然環境を持っている。そしてそれにもなつてこの地域の歴史的發展も独自のものがあつた。われわれが、調査地としてこの地域をえらんだのは、以下の理由による。

1) ペルー北・中部海岸は、古来はやくから農耕の開けていた地域であり、またペルー共和国独立後も、世界市場を対象とした商品作物が大農園経営方式によって生産されてきた。住民は大部分メスティソであり、産業的に見てペルーでもっとも進んだ地帯を構成している。したがってこの地域に関しては、多くの先史学、歴史学、社会学、社会人類学上の調査がおこなわれている。これに反して南海岸は、先スペイン期にモチエ、ナスカ、イカ、チンチャのような有力な文化は生れず、またペルー独立後の産業発展も、北・中部海岸にくらべてはるかにおくれていて、各分野での研究がまだあまりおこなわれていない。

2) “進んだ”北・中部海岸地方においては、近代化が進行し、伝統的な文化パターンや社会関係が破壊されているのにたいして、“遅れた”南海岸においては、古い文化要素や慣習がより多く遺存している可能性が大きい。とくに、われわれの研究の目標のひとつである、ことなつた社会集団間の接触や、地域間交流に関して、興味ふかい事例がいまだに多く見出されるであろうとの情報が得られた。たとえば、北・中部海岸ではもうほとんど見られなくなっている、リヤマ、アルパカ牧民の海岸地方への進出が、この地方では現在でもひきつづきおこなわれている、と判断していい理由があった。

3) にもかかわらず、南海岸にも近代化の波が少しずつ押し寄せて来つつあることは疑いを容れず、そのため貴重な伝統的民族誌資料が失われてゆく危険がある。カマナ Camaná 川上流のマヘス Majes 川流域においては、マヘス、シワス Siguas のパンパの6万ヘクタールに灌漑をおこなおうとする、いわゆるマヘス計画 El Proyecto Majes が立てられ、ダムや発電所の建設が実施されたため、地域住民が労働者として雇用され、また外部からの労働者の流入によって、伝統的な生活様式に大変化がおこりつつあった [VALDIVIA 1978]。また、アレキパ市に本拠をおくグロリア乳業 Leche Gloria がアレキパ、モケグア、タクナの三県に原乳購入のシステムを作ったために、多くの農民が伝統的な農業をおこなってきた耕作地をアルファルファの牧草地に変えて乳牛飼育に転じつつあるため、それらの地方の文化や社会関係にも大きな変化がおこりつつある [JELICIC 1978: 141-148, 232-234]。したがって、伝統的な型の生産関係や社会関係に焦点をあてるペルー南海岸地方の民族誌的調査は、できるだけ早くおこなった方がよいと考えられる。

4) アプリマック県のカライバンパ、クスコ県のマルカパタのコミュニティ調査が同時期におこなわれることになっており、さらにアプリマック県アイマラエス Ayмараes 郡、アヤクチョ県パリナコチャス Parinacochas 郡、アレキパ県ラ・ウニオン La Unión 郡等の生態学的条件の一般観察がおこなわれる予定だった [大貫 1978b]

ので、それらの地方と南海岸の関係を知ることは有意義だと考えられた。

2. 調査の発端

調査の手がかりとなったのは、ペルー・カトリック大学が、カナママヘス川上流のCOLCA川流域のカイヨーマ Caylloma 地方でおこなった学術調査によって得られた情報 [PEASE (ed.) 1977] であった。カトリック大学の調査は、1591年の巡察 *visita* の古文書を発見し、それを分析した結果、同地方の農村が、プナ面での牧畜から、COLCAの溪谷の急斜面における農耕にいたる、垂直統御を古くからおこなっていたことをあきらかにした [PEASE 1977] が、1974—75年に同地方の民族学的調査をおこなったクアドロスは、現在の農民が、牧農にわたる垂直統御を引きつづきおこなっているばかりでなく、アルティプラノの塩、海岸地方における海産物、および海岸の島々におけるグァノの糞の開発もおこない、予想外に広い垂直統御の範囲を持っていたことをあきらかにした [CUADROS 1977]。このうちもっとも注目されるのは、海産物である。

グァノの糞はふるくからペルーの農民によって肥料として利用されてきたことはあきらかであるが、はたして山地の農民が海岸にまで降りてこれを採掘していたかどうかはよくわからなかった。クアドロスによれば、カイヨーマの住民たちは、海岸地方マタラニ Matarani 付近のヘス・デ・イニャニ Jesús de Iñañi 諸島でグァノの糞の採掘をやっていたという [CUADROS 1977: 50]。またリマの国立文書館所蔵の一文書 (Der. Ind. C. 490—1793—95) によれば、モケグア県の山地プキーナ Puquina 地方のインディオたちが、海岸のタンボ居住の1スペイン人を相手どって、ポコウンタ Pocohunta というグァノ諸島の資源所有権を主張した18世紀末の文書があるという [CUADROS 1977: 50, n. 5]。われわれが、調査中に、タクナの地方文書館で発見した1788年の文書にも、アリカ Arica のモロ Morro のグァノをインディオが自由に採掘する用益権を、エステケ Estique の首長フランシスコ・マルカ Francisco Marca がアリカ市の官憲に訴えた記録があった (Archivo Departamental de Tacna, ARICA-Estique, 1788)。それによると、インディオのグァノ採掘は「今日まで守られてきた、はるかむかしからの慣習である。」と記されている。だが今日では、山地のインディオ農民が、海岸ないしは沿岸の島々のグァノを採掘しつづけている例はまったく見られないと言ってよい。これは、外資系の会社がペルー政府からグァノ採掘権を得、モエンド Mollendo—マタラニ地方で1909年から事業を開始したためであろう [CUADROS 1977: 50, n. 7]。

塩の採掘もふるくからカイヨーマの農民の慣行であつたらしい。彼らは、高地のユタ Lluta にある塩山に特別の権利を持ち、1年の一定の時期にキャラバンを組んで、塩の採掘に出かけたという。しかしこれも現在ではおこなわれていない。しかし、カイヨーマよりさらに高い土地に住む牧民たちは、ユタとワンボ Huambo の塩山に行き、採掘した塩をリヤマのキャラバンで輸送する習慣を現在に至るまで保ちつづけている。そしてこれは、19世紀末にペルー政府が塩の専売をおこなうようになり、塩山の国家管理をおこなうようになってもつづいている [CUADROS 1977: 46-48]。われわれがアレキーバ県シワス川上流のピタイ Pitay 村ピエ・デ・ラ・クエスタ Pie de la Cuesta で得た情報によれば、現在でもプナの牧民たちがユタの岩塩を持ってときどき降りてきて、農民の生産するトウモロコシ、小麦、イチゴなどと交換するとのことであった。交換の比率は、塩 1 quintal (=46 kg) にたいして、トウモロコシ等 2 アローバ arroba (1 arroba=11.502 kg) とのことである。なお岩塩は食用にするのではなく、薬用に用いるのであり、アグアルディエンテ、オレンジの皮、ニッケなどとまぜて調合し、カチカンカ cachicanca という、流寒、肺炎、気管支炎などの特効薬を作るのである。最近の情報によると、ペルー政府は、ユタ、ワンボの塩坑も入口をふさいで採掘を全面的に禁止したという。

グァノの採掘が19世紀にすたり、岩塩の採掘も政府によって統制されているのにたいして、カイヨーマの農民の海岸地方における海産物の採取は、今日でもさかんにおこなわれているという。ふたたびクアドロスによれば、カイヨーマ地方の海拔3,900メートルの高地にあるシバヨ Sibayo の農民は、毎年10月に海岸に降り、イスライ Islay の北西約7キロメートルのところにあるコロカ岬 Punta Coloca に約30日間居住して、魚をとり、貝類を採取し、コチャユーヨ cochayuyo すなわち海草を集めて、山に持って帰る、とのことである [CUADROS 1977: 48]。シバヨの農民のこの習慣が特殊なものなのか、それとも高地に住む農民や牧民が海岸に来て海産物をとることがペルー南部に見られる一般的現象なのかどうか、という問題を調査の出発点とすることにして、われわれは1978年10月11日、アレキーバ市から海岸のイスライに行き、マタラニ港で漁舟をやとって、海上からコロカ岬に迫ることにした。

その日はかなり波が荒く、コロカ岬近くの狭い砂浜に上陸することはできなかったが、岬の直前にあるタルプイ Tarpuy 谷の近くの岩壁の上で、コチャユーヨの狩場をさがす3人と、コロカ岬の海岸の絶壁の上から、コチャユーヨ採取のための岩場をさがしているらしい2人を認めた。同行のマタラニの漁夫によれば、やはりクアドロスが報告しているように、シバヨの高地民が10月にやって来て、貝類をとり、コチャユ

ーヨを集め、乾燥させてからマタラニに行き、そこからバスで郷里に帰る、とのことであった。コロカ岬からマタラニまで、収穫物運搬のためにマタラニ港の舟をやとうこともあるそうである。農民が10月に来る理由は、8月ごろからコチャューヨが大きくなり、また10月になると比較的海がおだやかになるので、岩壁に群生する海草の採取が容易だからだが、現在のように10月になっても海が荒いときには、多少滞在の期間をずらさなければならない、と説明された。コチャューヨは岩の多いところでなければ取れず、そのため採取作業は、絶壁からロープを垂らしそれに身を縛りつけておこなうためかなり危険がともない、時によると死者が出ることもあるそうである。シバヨの農民がとくにコロカ岬で作業をおこなうのはむかしからの習慣だからであり、べつに法的な権利を持つわけではない、とのこと、土地の漁民との間に紛争がおきないかとの問いにたいして、マタラニの漁夫は、われわれは漁船で魚を取るのが仕事であり、コチャューヨを取るのはもっぱらセラーノ serrano (山地民) だから、べつに問題はおこらない、と答えた。

山地民が、季節的にわざわざ海岸まで降って海産物を取ることにひじょうな興味をおぼえたわれわれは、アレキーパ、モケグア、タクナの南部3県の海岸を廻って情報を集めることを決意した。同時に、3県の川の流域をできるだけさかのぼって、低地に降りてくる高地の農牧民の活動と、低地農民との接触について調査することにした。

3. 高地民と海岸地方

1978年10月から1979年1月までの間に、われわれは、南部海岸の以下の川筋にそって調査をすすめた。北から順につきのとおりである(図3)。

1) アレキーパ県

アカリ川流域(河口からチャビニャ Chaviña を経てアカリまで)

ヤウカ Yauca 川流域(ヤウカからハキ Jaqui まで)

チャラ Chala 地方パララ Parara 溪谷(チャラからチャラ・ピエホ Chala Viejo まで)

チャパラ Cháparra 川流域(河口からチャパラまで)

アティコ Atico-カラベリ Caravelí 川流域(アティコからカラベリまで)

オコニャ Ocoña 川流域(河口からモエバンバ Mollebamba までと、中流のイキピ Iquipi 周辺)

カマナ-マヘス-ブランコ Blanco 川流域(河口よりアプラオ Aplao を経てチュキバンバ Chuquibamba まで)

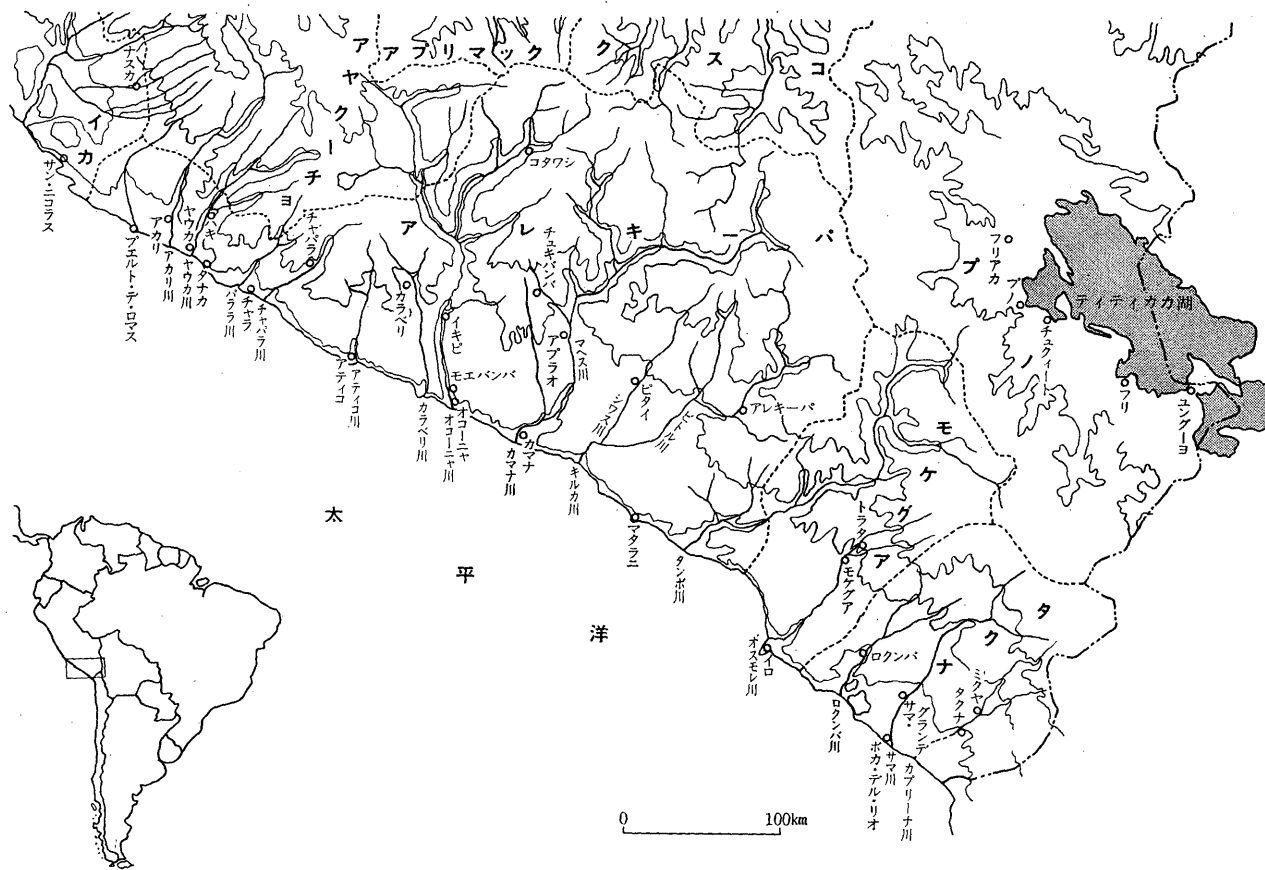


図3 ペルー南部海岸3県地図

シワス川流域（中流のタンビヨ Tambillo よりピタイまで）

キルカ Quilca 川流域（キルカ付近）

タンボ Tambo 川流域（ベインティヤタ Veintillata 付近）

2) モケグア県

オスモレ Osmore-トラタ Torata 川流域（モケグアからトラタまで）

3) タクナ県

ロクンバ Locumba 川流域（カミアラ Camiara からロクンバまで）

サマ Sama 川流域（河口のボカ・デル・リオ Boca del Río からサマ・グランデ Sama Grande まで）

カプリーナ Caplina 川流域（ラ・ヤラーダ La Yarada からタクナを経てミクヤ Miculla まで）

以上のほか、つぎの海岸地方の村落でも調査をおこなった。

（北から順に）タナカ Tanaka, アグア・サラード Agua Salada, プンタ・デ・ロボス Punta de Lobos, ラ・ボデガ La Bodega, オスクーヨ Oscuyo プエブロ・ヌエボ Pueblo Nuevo, マタラニ（以上アレキーパ県）イロ Ilo（モケグア県）

さらに、南海岸と中・北海岸を比較するため、イカ以北トルヒヨ Trujillo までの海岸のいくつかの地点でも関連調査をおこなった。

以上の結果、主として高地民の海岸地方における活動について多くの情報を得たが、それらを要約すると、大体以下のようにまとめられると思う。

- 1) 高地民の海岸低地における商業活動
- 2) 高地民の海岸低地における季節労働者としての出かせぎ
- 3) 高地民の海岸地方における漁撈活動
- 4) 高地民のうち、とくにリャマ、アルパカ牧民の、海岸地方を含む商業活動

本稿は、上記の4点について略述したものである。

4. 高地民の海岸低地におよぶ商業活動と出かせぎ

高地民、俗にセラーノと呼ばれる人々が、海岸地方に降りてきて、商業活動をおこなったり、定着して農園や鉱山で労働者になる傾向は、ペルーの北・中・南海岸地方で一般的に見られる。アレキーパ、モケグア、タクナの南部3県においては、高地のプノ Puno 県のアイマラ Aymara 系住民の活動がいちじるしい。

ペルー最南部県の首都タクナを例にとってみると、隣接した山地のプノ県からの流入は、1956年ごろから急にはげしくなったというが、1972年の国勢調査によれば、同

市の人口95,444人のうち、タクナ県生れの住民が、59,128人にたいし、プノ県出身者は20,591人で、第2位である。そして、第3位のアレキパ県出身者4,073人を大きくひきはなしている。またプノ県出身者を年齢別に見ると、14才までが男1,865人、女1,550人、15-29才が男6,306人、女4,140人、30-44才が男2,728人、女1,752人、45-64才が男1,127人、女605人、65才以上が男277人、女183人で、30才以下の若年層が男女ともに多く、全体の約6割5分を占める。タクナの住民によると、プノ県の若者はタクナに出ることに夢を託しており、男性は軍隊に志願し、海岸に駐屯して除隊後そこに職をみつけようとし、女性は女中となってタクナの家庭に住みこむことが多いとのことである。また、多くのアイマラ商人が高地から、チャルキ charqui, チャローナ chalonga 等の乾肉やチュニョ chuño (乾燥ジャガイモ), キノア quinoa などのアルティプラノの産物を運んで市場等の商人に売り、また低地の産物を高地にもたらす。一部のアイマラ商人は、トラックを所有して、ペルー中部海岸地方から来るオレンジ、パルタ等の果物を仕入れ、国境を越えチリ領のアリカで売って、かわりにチリ産のリンゴその他を購入し、タクナやモケグアの市場に売っている。とにかく、道路の発達と自動車輸送の発達によって、プノ県のアイマラ人が、地域的流通において多数活動していることはたしかである。

商人のほかに出かせぎ人も多い。オコニャ、カマナ-マヘス、キルカ等の水量ゆたかな川の河口近くでは、水田耕作がおこなわれているが、その田植えや収穫には、多数のアイマラ人が季節労働者としてやってくる。元来南部3県は、平地にめぐまれないため北海岸のような大アシェンダは存在せず、ミニフンディアが多かった。北・中部のアシェンダが、農地改革後共同組合経営となったものが多いのにたいして、南部3県ではミニフンディアが小作農に分配された例が多く、したがって現在では3-5トポ topo ていどの耕地を所有する自作農が大多数を占める。カマナ付近で得た情報によれば、それらの自作農は、8月なかばに播種し、苗代を作ってから10-11月に田植をするが、その田植のとき、プノ、フリアカ Juliaca 方面から来る多くのアイマラの季節労働者が雇われるのである。ボリビアとの国境のデサグアデーロ Desaguadero からすら来るといふ。彼らは、請負いで、トポいくらというぐあいに契約して仕事をす。トポあたりの賃銀は1,500-4,000ソル（現在1ソルは1円弱と考えてよい）であり、土地の状態によって支払われる金の差がつく。カマナ、オコニャなどで聞いたかぎりでは、こうした水田耕作は30年以上むかしからおこなわれ、アイマラの季節労働者も古くから働きに来ていた。そしてむかしは、馬やラバに乗ってやってきたが、今ではもちろんバスで来る。大体きまった人々が顔なじみの農家で働くのがふつうで

あり、宿泊のための小屋も無料で提供される。2月の収穫のときにも彼らは同じ家に来てくれる。彼らは、高地の住所にも小さな農地を持っていて、ジャガイモ等を耕作するのだが、農耕労働の時期が山と海岸ではくいちがっているため、それを利用して働きにくるのである。家族連れで来て、食事の支度などはすべて女連中がやる。そして、報酬ももらってのち、市場でトウモロコシや小麦その他の品々を買って山に帰るのである。彼らは安い電気製品などもこのんで購入するので、今日高地のアイマラ部落で日本製のトランジスター・ラジオを見かけることもめずらしくない。

田植は一種の熟練労働であり、賃銀も比較的高くて、労働者1人あたり1日500ソル以上の収入になるという。南部3県の農家では、もっと単純な労働のためにもアイマラ人をやとっている。たとえば、アレキパ市のある盆地は、ペルーでも有数のタマネギの産地として有名だが、この収穫にアイマラ人が、1日150-200ソルの賃銀でやとわれる。熟練を要しない仕事なので、女子供が多いが、彼らは集団をなして農家から農家へと渡りあるいて行く。

これらアイマラ人の商業活動、季節労働による高地と海岸平地との間の移動は、年とともに大規模になって行くようである。ガルシ・ディエスの1567年の文書に示されているように、もともとティティカカ盆地とそれに接する海岸地方は、それぞれ独立した生活圏をかたちづいているのではなく、共生的関係にあるのであり、その条件を前提としてそれぞれの生産・文化の構造ができあがっていると考えるべきである。チュクィート文書にあらわれたルパカの首長のサマ、モケグアにおける飛び地経営に似たような高地・低地の関係が今日でも存在しているのかどうか、かつてフロレス・オチョアが調査したことがあったが、チュクィートからセピータ Zepita にいたるまでの農民のインフォーマント65人のうち、7人までが「ひじょうにむかしの時代から」海岸低地に畑を持っていると答えたそうである [FLORES OCHOA 1973: 197]。それだけでなく、ポマタ Pomata のカンガイ Kangalli およびランパ・チョコ Lampa Chico のコムニダやフリ Juli などには、海岸低地に「割り当て地」*ración* を持つ農民がかなりいることも注目される [FLORES OCHOA 1973: 199]。これは、海岸低地の個人の耕地や農園でペオン *peón* として働く労働者が、一定の広さの借地を与えられ、その収穫物をじぶんのものにする慣行である。われわれはシワスでも似たような情報を得た。すなわち、カイヨーマ地方その他の山地人たちが、シワス川流域の農地でペオンとなり、何年かたつと割り当て地をもらうのだが、シワスではそれをレパルティシオン *repartición* と称していた。レパルティシオンをもらったペオンはそこで耕作をおこなって生活の資を得、住みついて数年すると結婚する者が少ないが、彼らはじ

ぶんたち本来の山の居住地にも畑を持ち、家族を残しているの、ときどきそこに帰るのだという。レパルティシオンと家族を持つ高地人のペオンが、突然すがたを消して帰ってこないことも珍しくないそうである。

ペルーの南部3県にはプノ県内のすべての地方からの移住者、季節労働者等が見られるが、フロレス・オチャは、ポマタからフリまでの住民がタクナ県に、イラベ Ilave からアコーラ Acora までの住民がモケグア県と結びつく傾向がつよいと言っている [FLORES OCHOA 1973: 198]。今回のわれわれの調査で得た資料から判断すると、これに加えて、プノ、フリアカ方面の人々はとくにアレキープ県と結びつきがつよい、と言っていると思う(図4)。

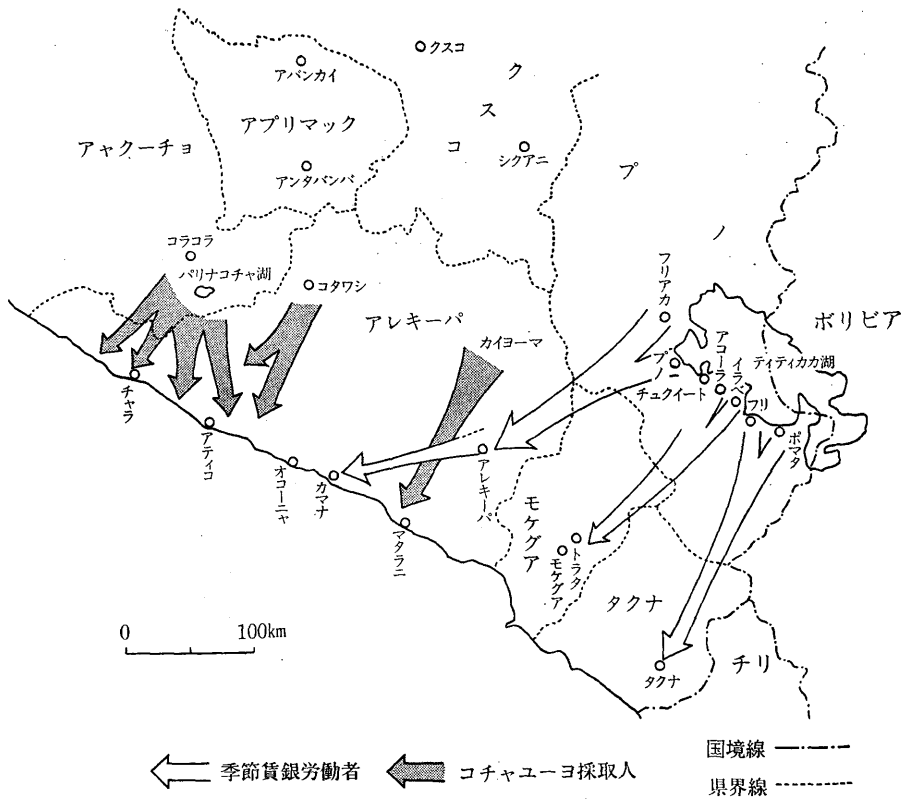


図4 高地民の海岸進出

5. 高地民の海岸地方における漁撈活動(1)

上に見たように、高地の住民は、海岸低地とさまざまなかたちで結びつく傾向を示しているが、彼らの海岸地方における活動の中で、とくに注目すべきものは、季節的な海産物採取である。すでに、シバヨの農民のコロカ岬におけるコチャユーヨ採取については述べたが、コチャユーヨ採取は、イカ県南部からアレキープ県にかけての海岸地方でひろくおこなわれている。そしてそれをおこなうのは、すべて高地民である。

コチャユーヨは、ケチュア語で、cocha は池、湖、水たまりなどをさし、yuyo, yuyu は草を意味するから、淡水の湖、河川などに生える藻や、海草をおしなべてさすことばである。したがって山の湖などの藻も cochayuyo と称することはあるが、現在ふつうには、コチャユーヨという海草をさし、淡水の藻は、クシュロ cushuro, ムルムンタ murmunta, ヤユチャ llallucha, ヤイタ llayta (アイマラ語) など呼んで区別している。コチャユーヨもクシュロも、インカ時代からひろく高地民によって食用に供されていた [ANTUNEZ DE MAYOLO R. 1978: 283; HORKHEIMER 1973: 105]。17世紀のクロニスタ、ベルナベ・コボは、その『新世界史』の中に「コチャユーヨ」という一章をもうけ、次のように言っている。

「インディオはこの草を食事の中にたくさん用いるが、エスパニヤ人すらもこれをロクロ locro という煮物に使う。そのために、その草をたくさん集めてかわかし、インディオは小さなパン panecillo にして売る。夕食のあと、この草を水に割った酢といっしょに食べると、安らかに眠ることができる。またそれを煮だした汁に砂糖を加えて飲むと、ひどい月経が止る。この草を、つきつぶし、あたためて眼にあてると、炎症を和らげ、痛風の痛みを和らげる。」[Cobo 1956 (1653) Lib. 4, c. 41]

コチャユーヨ採取人は、さまざまなかたちで南部海岸地方に進出している。大別してふたつの形態が区別される。海岸地方に恒久的に定着した人々と、季節的に滞在する人々のふたつである。後述するように、南海岸一帯でとれるコチャユーヨはみな岩に生成する *Porphyra* 属の種類である。海岸に台地が突出して岩壁をなしている場所が多いアレキープ県は、とくにその中心的産地である。コチャユーヨの主な産地として特にその名を指摘されたのは、次のような場所である。ボカ・リオ・イカ Boca Río Ica, マルコナ Marcona (Lomas de Marcona の海岸), ロマス Lomas (ロマス港付近), タナカからチャラを経てアティコ辺までの海岸, オコニャ, カマナ間の海岸。す

なわちイカ県の南部からアレキープ県におよぶが、タクナ県南部のモロ・サマ Morro Sama, コロラダ岬 Punta Colorada 付近も産地である。

今回の調査において、非定住的なコチャユーヨ採取人には、アレキープ県のタナカ、プンタ・デ・ロボス、オスクーヨ等で会うことができた。

タナカは、オリーブ栽培によってゆたかなヤウカの住民が、夏の休養地として多くの別荘を持っているため戸数は多いが、実質人口は数十人でいどの小さな海岸村である。タナカからはじまって、その約30キロメートル先のチャラまでは、岩壁が海に面してつづいているため、絶好のコチャユーヨの採集地である。タナカの別荘（と言ってもアドベづくりの簡単な家屋にすぎないが）は、コチャユーヨの成育期である8-12月には空屋になっているため、そこに高地から降りてきた人々が、3、4カ月住みついて、毎日コチャユーヨをとるのである。タナカの場合、ほとんど背後のパリナコチャス、コラコラ Coracora 地方出身である。家族ぜんぶで来るのがふつうで、とったコチャユーヨを乾かし、型に入れて長さ45~50センチメートル幅20センチメートルほどの板（プランチャ *plancha*）を作る。これがコボの言う *panecillo* であろう（図5）。採集人自身がこれをイカの市場に売りに行くこともあるが、仲買人が買付けに来る。また山に引きあげる時には、自家消費と交換用にかなりのプランチャを持って行く。

チャラとアティコの間の中間のプンタ・デ・ロボスにも、12戸よりなるコチャユーヨ採取人の集落があるが、ここでは住民の出身地は多様であり、アレキープ県北部高地のパンパコルカ Pampacolca, アンダグァ Andagua, アヤクチョ県南部のパリナコチャス, クスコ県のシクアニ Sicuani, プノ県のユングーヨ Yunguyo などで、いずれも

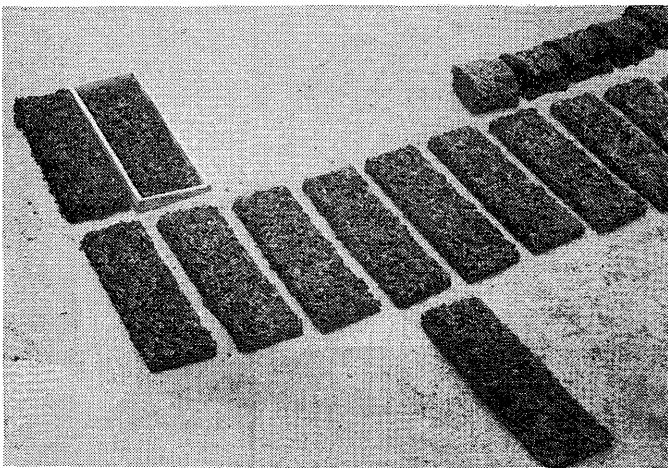


図5 コチャユーヨのプランチャ

コチャユエの季節に一時的に山から降りてきて居住するのである。一軒だけ、飲料水、タバコなどを扱う老婦人が一年中そこに住んでいて、コチャユエの季節が終わって山に帰った人の留守宅を管理するとのことであった。

アグア・サラダ（リマより 665 km 地点）からアティコの方にむかって、ピエドラ・ブランカ Piedra Blanca (674 km), チョリヨス Chorrillos (686.5 km), プラヤ・エルモサ Playa Hermosa (689.5 km) 等にもコチャユエ採取人の集落はあったが、アティコを越してオコニャにむかう途中にも、ラ・ポデーガ (710 km), オスクーヨ (717 km) などにコチャユエをとる高地人がいた。とくに興味ふかかったのはオスクーヨであり、海岸に張り出した台地の上に、石造建造物の遺跡があり、その一部に小屋を作って、プノ県アヤビリ Ayaviri 出身の家族が住んでいた。彼らはコチャユエのプランチャを、遺跡の一部の壁を利用して作った石室に貯蔵していた。アレキパ県の高地から来ているというもう1家族は、遺跡自体を利用して作った小屋に住んでいた。アヤビリの家族は、コチャユエの季節が終るとカマナの農家に賃銀労働者として働きに出ると言っていたから、あるいはもう郷里に帰ることはないのかもしれない。

定住型の集落としては、タナカとチャラの間にあるアグア・サラダがあげられる。コチャユエ採取人の集落は季節居住が一般的であって、このような定住型は例外と言うべきかもしれない。アグア・サラダは汎アメリカ道路に面した台地の上であり、25家族が住んでいるが、その大部分がコロラ地方出身で、三家族がアレキパ県北部のコタワシ Cotahuasi 出身である。いずれも郷里をはなれて定住しているので、最近学校まで建てたという。コタワシ出身のひとりのインフォーマントによれば、アグア・サラダが定住集落として成立したのは10年前（1968年）で、彼が住みつけた当時は5家族しかいなかったという。彼自身は北海岸のヘケテペケ Jequetepeque から南海岸のイカにいたるまでの多くの土地で農業労働者として働いていたが、父親の代からコチャユエ取りのために季節的に来ていたアグア・サラダに、8年前の1970年に定着した。他の家族も、むかしからコチャユエの季節に来ているうちに、いつとはなしに定住してしまったものが多いという。アグア・サラダでなぜこのような定住集落が出来あがったのか理由は不明だが、想像するに、タナカからチャラに至るまでの絶好のコチャユエ生息地の中間点に位置するため、産出量が多く、安定した収入が得られるということが、理由のひとつであったのだろう。

とは言うものの、コチャユエ採集の時期は、1年のうち8カ月にも満たないから、アグア・サラダの住民は、他の労働に従事して収入をおぎなう必要があった。12月

にコチャユーヨの季節が終ると、彼らは同じ場所で貝類やウニの採取をおこなう。2月末から3月にかけて、カマナの稲の収穫がはじまるのでそこへ行って働く。それが終ると、近くのヤウカ川流域一帯のオリーブ園の収穫の時期になるのでそちらへ移動する。そして6-7月になると、ふたたびコチャユーヨの採取が開始されるというわけである。以上のようにアグア・サラダの人々は、年間を通じ現金収入があるので、かなり裕福であり、コチャユーヨ採取の現場に行くためのオートバイを持っている者が多い。輸送用の小型トラックを持っている者もある。彼らは、じっと村に住みこんで仲買人が来るのを待つのではなく、じぶんから産物をイカやチャラの市場に売りに行き、また近辺の川の流域に販売に出かける。あとで、ヤウカ川流域のハキ等でたしかめたところによると、アグア・サラダの人々は直接にコチャユーヨを売りに来るそうである。しかも、品物が足りなくなると、彼らはオスクーヨの採取者のところまで出かけて行ってプランチャを仕入れるとのことであった。上にあげたコタワシ出身の採取人などは、アグア・サラダでレストランを経営し、また郷里のコタワシで農地改革（1969年）の結果所有するようになった耕地を小作に出して収入を得るなど、小企業家的な活動をおこなっている。そして彼だけでなく、村全体が、道路と輸送の発達による流通の中に積極的に入りこみ、強いプロフィット・インセンティブに動かされて多角的な営為をおこなっていると言えるのである。アグア・サラダでは、コチャユーヨ1キログラムを仲買人に110ソルで売り、それをリマの商人が180ソルで買取るとのことであったが、各地でしらべてみると、小売価格はまちまちであり、チャラでは1キログラム150ソル、リマ市のリンセ Lince の市場では250ソル、イカの市場では300ソルであった。アグア・サラダの住民は、ヤウカ、ハキ等まで出かけて行って売る場合には、当然仲買人に売るよりもいくらか高い値をつけるはずである。したがって、彼らが年間平均して10万-10万5000ソルの現金収入をコチャユーヨによって得ることはさして困難でない。アグア・サラダでは、コチャユーヨを乾したりプランチャを作るための共同作業場（図6）があるが、貯蔵庫は設けられていない。各家々で製品を保管するという。これは製品の販売がすみやかにおこなわれているため、滞貨がないからだろう。

コチャユーヨ採取人が小企業化しつつあるもうひとつの例は、プンタ・デ・ロボスのひとりのインフォーマントにおいても見られた。彼自身はコチャユーヨや貝類の採取に従事しているが、もともとコチャユーヨとりだった彼の父親は、金をためて小型トラックを買い、カマナに居をうつして仲買人を始めている。生産と流通を分担して小さな家内企業ができあがっているわけで、これが需要のいかんによって興味ふかい

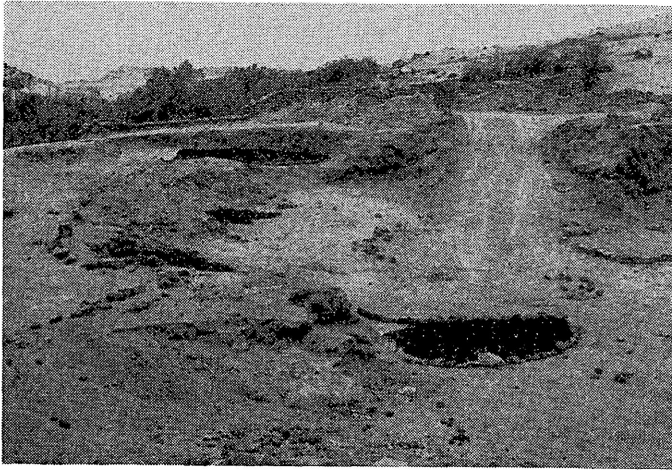


図6 アグア・サラダのコチャユーヨ乾燥場

成長と変貌をとげる可能性もある。そして、プンタ・デ・ロボスの集落の中で、このインフォーマントだけが、海岸地方に恒久的に定着する可能性を見せているのである。

先に、アグア・サラダのような定住型のコチャユーヨ採取人集落は例外的だと言ったが、しかし、あちらこちらで定住の傾向が出てきていることは、プンタ・デ・ロボス以外でも見られる。たとえば、4キロメートルほどの長さで細長くひろがったチャラの海岸平野には、コチャユーヨ採集人が点々と小屋を作っているが、彼らの仕事場は、タナカとチャラの間の岩壁の多い地帯であり、あるインフォーマントは、15年前からその地帯の中のモカ渓谷 Quebrada de Moca でコチャユーヨや貝類、ウニなどをとって生活していたが、子供が出来、学校の問題がおこったので、チャラに家をつくり、じぶんだけモカにある小屋に住んで作業をする、と言っていた。彼はもともと高地のコラコラの出身であったが、今ではすっかりチャラの住民になっている。

6. コチャユーヨとクシュロ

ペルーの住民が、コボの記録しているように、17世紀のむかしから今と同じコチャユーヨのプランチャを作っていたことはひじょうに興味ぶかいが、チャラ付近にあるインカ期の遺跡ケブラーダ・デ・ラ・バカ Quebrada de la Vaca の倉庫の遺構にも、ウニの殻、貝殻、トウガラシ、トウモロコシなどとともに、コチャユーヨが見出されるので、すでに16世紀以前から利用されていたことが推定される。現在でもコチャユーヨは、スープ、ピカンテ picante 料理、セビチェ sevice その他にひろく使われ、海岸地方だけでなく、山地でも、もっとも好まれる料理材料のひとつである。コチャ

ユーヨは、アレキーパ、モケグア、タクナはもとより、プノ、クスコ、ラ・パス、アヤクーチョなどの市場で販売されている。

ところが、前に述べたように、コチャユーヨは、塩水（海）のものと淡水（川や湖）のものに大別される。そして、今まで扱ってきたのは、言うまでもなく海産のコチャユーヨであるが、淡水のコチャユーヨもひろい分布を示している。後者はクシュロ、ヤイタ、ムルムンタ、クレスピート *crepito*、ラチャパ *rachapa*、ウルルマ、ウルルパ *ururupa* などさまざまに呼ばれるが、いずれも *Nostoc* 属である [ALDAVE PAJARES 1969: 5]。 *N. commune*, *N. sphaericum*, *N. pruniforme* の3つの種が同定されており、海拔2,300-4,500メートルの範囲に生成し、雨期に繁殖する [ALDAVE PAJARES 1969: 7]。そして少くともカハマルカ県からプノ県にいたる広い地域に見出される、と報告されている [ALDAVE PAJARES 1969: 25-27]。クシュロは、海のコチャユーヨ同様、スープやピカンテ料理に用いられるが、その味については、海のコチャユーヨよりも柔くてうまい、という評価と、海のコチャユーヨの方が塩気があってうまい、という評価に分れる。タクナ市のあるインフォーマントによれば、“clásico” な方法としては、牛とか陸の動物の肉にヤイタを加えて調理し、魚など海産物とコチャユーヨをいっしょに料理するのが習慣であったが、今ではこの区別は守られなくなっているという。かつては、淡水の藻と海草には、べつの valor が与えられていたのかもしれない。

コチャユーヨやクシュロは、汎中央アンデス的な食物のように見えるが、こまかく検討してみると、いろいろ問題点はある。まずアレキーパ、モケグア、タクナ、クスコ、プノ等の南部諸県、アプリマック県、およびアヤクーチョ県の南部などでは、このふたつは普遍的な食物と言ってよい。しかし、海岸の漁民はあまりこれを取らず、もっぱら採取に従事するのは高地民であり、前者は後者をやや *peyorativo* な眼で見ている気味がある。また高地民のすべてが海岸に来てコチャユーヨをとるわけではなく、貧しい人々がそれに従事するのである。オスクーヨのアヤビリ出身者は郷里には耕地を持たず、“Somos pobres.” と言っていたし、プンタ・デ・ロボス、ピエドラ・ブランカ等の住民もみな山ではうだつがあがらないために海岸に出てきた点では一致していた。アプリマック県の高地カライバンバで得た情報によれば、「かつては多くの人が、アレキーパ県の山をはるばる越えて、チャラ、アティコ、そしてロマスにコチャユーヨをとりに行った」が、「貧乏な連中が行ったのだ」（友枝啓泰氏収録テープより）、とのことである。

さて、アレキーパ県から北のイカ県に入ると、様相が一変する。すなわちコチャユ

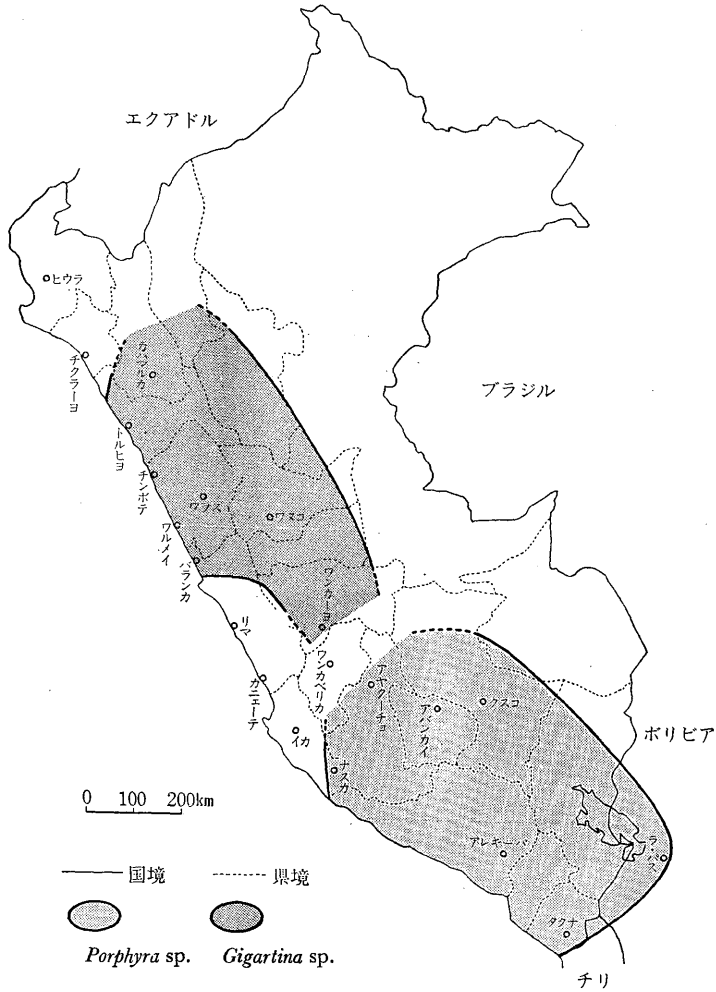
ーヨは、だれでもが口にする食物ではなくなるのである。たしかに、イカやナスカやパルパ Palpa の市場でコチャューヨは売っている。しかし市場に来る市民に聞いてみても、そんなものは知らない、とか、食べたことがないとかいう返事がかえってくる。ナスカでは、「コチャューヨはパイサーノ paisano がとり、クリオーヨ criollo はとらない、」という表現を聞いた。パイサーノとは「田舎者」の意味であろう。ナスカには、主にアヤクーチョ県南部から降りてきて、マルコーナの鉱山などで働く高地人が多い。マルコーナのロマス等で高地人がとるコチャューヨは、おそらく主にこれらの労働者によって消費されるのであろう。それでもナスカでは、「クリオーヨ」であってコチャューヨを食べる人に会わないではなかったが、イカまで北上すると、コチャューヨは完全にセラーノすなわち高地人の食物で、クリオーヨはまったく無関心であった。さらに北のカニエテ Cañete, マラ Mala, アシア Asia の流域などでは、コチャューヨはまったく食べられない。リマまで来るとコチャューヨはふたたびすがたをあらわす。おそらくリマには南部県や高地から来た人々が多いからであろう。リマのクリオーヨたちの間でも、コチャューヨはけっしてポピュラーな食物ではない。

リマ以北はどうだろうか。市場で見るとかぎり、バランカ Barranca, ワルメイ Huarmey, カスマ Casma, トルヒヨ等では、コチャューヨと称するものは売ってはいないが、南海岸に産するものとはぜんぜん別種で、ところによってはモコチョ mococho と呼ばれる、ヒモ状の海草である。セサル・アクレト César Acleto によれば、これは *Gigartina* 属の海草であり、*Gigartina chamissoi* がもっとも多く、ピウラ Piura, ラ・リベルタ La Libertad 県のプンタ・ネグラ Punta Negra, プエルト・チカマ Puerto Chicama, アンカシュ Ancash 県のバイア・デ・チンボテ Bahía de Chimbote, リマ県のバランコ Barranco, バイア・デ・アンコン Bahía de Ancón, チョリヨス Chorrillos, プクサナ Pucusana, イカ県のバイア・サン・ニコラス Bahía San Nicolás, ラグニャ Lagunilla, ピスコ Pisco, チンチャ諸島 Islas Chincha などから報告されている [ACLETO 1971: 58-59]。1-4.5 mm の幅でたしかにヒモ状をなし、長さは 6-45 cm に達する。サンチェス・ロメロ Sánchez Romero は *Gigartinaceae* 科の海草を 8 種類あげ、いずれもペルー北・中部海岸に分布するとしている [SANCHEZ ROMERO 1977: 250]。

南海岸のコチャューヨは *Bangiaceae* 科 *Porphyra* 属の海草である。アクレトによれば、中、南部海岸に多く、ラ・リベルタ、ピウラの海岸からも産するが、岩壁が比較的少ない北海岸では少ないとのことである [ACLETO 1971: 23-25]。アクレトは、4 種の *Porphyra* 属の海草をあげているが、いわゆるコチャューヨは *Porphyra columbina*

である [ACLETO y ENDO 1977: 3]。岩に付着して育ち、大きくなると長さ 35 cm 幅 9 cm に達して、*Ulva fasciata* と群叢する。時によると *Gymnogongrus furcellatus*, *Ahnfeltia durvillae*, *Prionitis decipiens* の上に着生することもある。中部海岸(アンコン, バランコ, プクサナ)では, *Porphyra pseudolanceolata* と生棲地を同じくする [ACLETO y ENDO 1977: 3-6]。

南と北の“コチャユヨ”のちがいはひじょうに興味ぶかい。バランカより北では *Gigartina*, ナスカより南では *Porphyra*, そしてその中間には, 海草を食べない海岸部の地帯がある。南のコチャユヨは, アヤクーチョから南の諸県に流通し, ポリビアのラ・パスにまでも達する。北のコチャユヨも高地にはこばれ, ひろく食用に供さ



れているようである。バランカ、カスマ等で聞いたところによると、海岸地方ではセビチュに使われるだけだが、山ではスープに入れたりピカンテ料理に使われるということである。そして、カハマルカからワンカヨ Huancayo に至るまでのひろい地域で用いられている。アクレートがあきらかにしているように、*Porphyra columbina* はけっして南海岸だけに限られず、北・中部海岸でも岩の多い海岸では取れる。ワルメイの市場では、売られている *Gigartina* にまじって *Porphyra* がたしかに認められた。にもかかわらず、*Porphyra* はほとんど無視されているようである。カスマの市場の魚売場にも、*Gigartina* が積まれていたが、売子のひとりがアレキパ県出身で南のコチャユヨをよく知っており、「南では南のコチャユヨをたべて北のコチャユヨはすて、北では北のコチャユヨをたべて南のコチャユヨをすてる。」と言っていた。*Porphyra* と *Gigartina* が重複している地域もあるだろう。たしかに高地ではそういうことがありうる。しかし、大局的に見て、北・中部と南部では、ちがった種類のものが用いられている、と断定してあやまりではないだろう。この区分が、中央アンデスにおける文化領域的な差を反映している可能性はないだろうか？(図7)

7. 高地民の海岸地方における漁撈活動 (2)

コチャユヨ採取民は、海草だけでなく、多くの貝類やウニなどの海産物もさかんに取って生活の資とする。また、コチャユヨを取らずに、それらの、いわゆる mariscos の採取に専従する人々もいる。コエプケは、ペルーの海岸の環境を五つに分け、岩壁の海岸、岩の多い海浜、砂浜、マングローブ叢林、河口としているが、とくに岩壁の海岸は南部に多く、動物群がゆたかである、と言っている [KOEPCKE 1968: 9]。事実、アレキパ県からタクナ県にかけては、チャンケ chanque (*Concholepas concholepas* または *Concholepas peruanus*)、ラパ lapa (*Fissurella crassa*)、バルキヨス barquillos (*Enoplochiton niger* と *Acanthopleura echinata*)、チョロ choro (*Aulacomya ater*) 等の貝類やウニ (*Podophore pedifera*) が豊富に産する [KOEPCKE 1968: 10; SCHWEIGGER 1964: 198]。ウニは海岸地方でスープやピカンテの材料にされる。貝類は生のまま市場で売られ、種々の料理の材料にされるが、乾燥させて保存食料とする習慣も南海岸では広く見られる。

チャンケは、別名トリーナ tolina またはパタ・デ・ブロ pata de burro、パティプロ patiburro、と言い、ロボス・デ・アフエラ Lobos de Afuera からチリ海岸にまで分布している。チリではロコ loco と呼ばれる。切り立った岩のなめらかな表面に固く付着し、アワビに味が似ている [SANCHES ROMERO 1977: 255]。チョロは、8-30メー

トルの海深の岩の上に生息し、ペルー北海岸のサラベリ Salaverry からマゼラン海峡までの広い分布を持つ。ペルーでは“うまい貝”として大量に消費される。

ペルー高地民との関係でもっとも重要な貝は、なんといってもマチャ *macha* (*Mesodesma donacium*) である。この貝は、ペルー北部のセチューラ Sechura からチリのチロエ Chiloé 島まで分布し、岩ではなしに砂浜の 5-15 cm の深さに住む。ペルーでこの貝がもっとも多く取れるのは、ピスコ、ロマス、オコニャ、カマナおよびイロであって、夏季(12-2月)にもっとも多く取れる [SANCHEZ ROMERO 1977: 257]。マチャはマチューロ *machero* と呼ばれる特別の人々によって採取される。マチューロは、カマナおよびタクナ県南部に集中している。カマナのマチューロには二種類あり、夏の間高地のプノ県から季節的に海浜に住む人々と、本来カマナに住居を持ち、海岸に寝泊りする仮小屋を作って、年中マチャ狩りをする人々に分れる。作業は、潮の引いたとき、道具を使わず手でおこなわれ、イシグァ *isigua* という編みかごの中に入れられる。マチャはそうして生のまま市場に売られることもあるが、多くは乾され、45-50 キログラム入りの小さな麻袋かポリエチレンの袋につめられる。収穫量は、夏に一袋、冬にその半分というのが一日の平均であるという。1972年にとれたマチャの量は 600 T. M. だったというが、それ以後マチューロの数は増加しているにもかかわらず、供給量は減少している。おそらく濫獲が原因であろう [ONERN 1973: 559]。マチャの生産量の約半分はリマ、30%はアレキパに運ばれ、そこから地方の市場ワンカーヨ、アヤクーチョ、クスコ、プノ等へ行くという。リマに持ちこまれるマチャの約95%はカマナから来、あとの5%がワルメイ、ピスコ、マタラニなどから来る [ONERN 1973: 560]。マチャの仲買人はコピアドル *copiador* と呼ばれ、カマナ市のアグスティン・ガマラ街にあるマンコ・カパク *Manco Capac* という集積場に行って買付けをする。マチャの値は当然のことながら夏季に安く、冬季に高い。1978年冬におけるカマナ等の市場での価格は、1キログラム120-180ソルであった。カマナ郡の役所は、他の都市の市場に持ち出されるマチャに対し、1袋あたり3ソルの税金を課している。乾燥マチャについては、コピアドルが直接海岸に出かけて行って仕入れ、カマナの市場の小売り商人に納めるのがふつうである。ただし、マチャを乾かすのはマチューロではなく、パサドル *pasador* と呼ばれる人々である。

マチャの採取に従事する人々の数は、夏季にはカマナだけで1,000人を越すという。冬にはそれが3分の1になるというから、3分の2がプノ県から来る季節労働者と考えてよいだろう。近年タクナ県の南部においてマチューロの活動がさかんになってきているという。その数ははっきりとわからないが数百人に達すると言われ、チリとの

国境にすぐ近いサンタ・ロサ Santa Rosa, ロス・パロス Los Palos, ラ・ヤラダ等に、プノ県の人々が季節的に降りて来て小屋に住み、マチャを取って乾かす。タクナの人々は乾したマチャは食べないので、製品はすべて他の地方に送られると考えてよい。タクナ県の海岸においては、コチャユーヨはあまり取れないので、アレキーパ県におけるコチャユーヨ採取に代る高地民の活動として、マチャ採取がおこなわれるようになったのであろう。

マチャは南部3県におけるもっとも生産量の多い海産物であるが、リマ、アレキーパを経て、または直接ルートによって、大量の乾燥マチャが高地に送られることは注目してよい。しかし、乾かして取引されるのは、マチャに限らない。たとえばアレキーパ市の市場で観察したところによれば、つぎのようなものが干物にして売られていた。貝類ではマチャ、ラパ、トリーナ、魚ではコヒノバ *cojinoba* (*Neptomenus crassus*), トヨ *tollo* (*Mustelus* sp.), それに食用蛙、川エビ (あとで述べるカマロン *camarón*), コチャユーヨがあった。もともと、チュニョやチャルキ (乾肉) の例を見てもわかるように、乾燥させて食物を保存するというのは、高原民の間で考えられた工夫であった。上に述べたような海産物が、干物にされて高地民の間に廻っているという事実は、もともとそれらの海の産物を取る仕事は、海岸低地の人々だけでなく、高地の人々によってもふるくからおこなわれていたことを暗示している。そのほかにも、アレキーパ県のチャパラ川の河口近くその他で、内陸・高地の人々が、トビウオの卵をとって干物にしているのを見たが、これもカウカウ *caucau* と呼んでクスコその他の市場で売られている。スペイン人が牛や豚や鶏をもたらすまでは、アンデスの高地民はリヤマの肉しか食べなかった。それを補う蛋白源として、海産物が利用され、貝や魚を乾して輸送することが古くからおこなわれていた可能性を考えてみる必要があるだろう。最近、ペルーの古代文明成立にあたっての海産物の重要性が強調されはじめている [MORSELEY 1975] が、中央アンデスの民族誌も、同じ角度から見なおしてみる必要が感ぜられる。すでに17世紀に、イエズス会士のベルナベ・コボ (前出) はこの点に注目して、中央アンデスの住民は祭のとき以外肉をたべないけれどもチャルキを作って、トウガラシ、チュニョ、ジャガイモその他の野菜とまぜてロクロ *locro* という煮物を料理する、と述べ、さらに「この煮物は干し魚でも作られ、干し魚もひじょうによく使われる、」 [COBO 1956 (1653) Lib. 14, c. 5] と書いている。

先にあげた干物の中に川エビがあったが、これも古くからペルーで捕獲され流通していたことをコボは記録している。

「川エビは、褐色であり、料理すると、サンゴのように赤くなる。いろいろな種類があり、大きいもの小さいものまちまちである。いずれもこのペルー王国でたくさん産する。そして干していろいろな地方に送られる。採取する時期は、川が満水でふくれあがる夏である。その時期に、川にスノコや籠を入れて、たくさん捕獲される。冬に川の水が澄んで少なくなると、平地のインディオたちは、分流の水をほかに流して干上らせ、カマロンをとる。」[Cobo 1956 (1653) Lib. 7, c. 9]

実はこの川エビが、マチャとならんで、カマナーマヘス川の主要な産物である。オコニャ、ビトル Vitor, タンボ、サマ等の諸川でもたくさんの川エビが取れる。そしてマチャ以上の普及度をもって、ペルー人の食卓に上る。

コボは、川エビ採取の時期が「夏」と言っているが、11月に山が雨期になり、水量が急に増したときが川エビの繁殖期である。コボの言うスノコ cañizo, 籠 nasa は最近までよく使われ、イサンガ izanga, チャウコ chaucu と呼ばれていた。近年では、夜間人工照明によって捕獲する方法も導入された。これらいずれの方法も現在では禁止され、ペルー漁業省は、水中メガネを使って採取をおこなうことを奨励している。投げ網を使う方法もあるが能率的ではない。伝統的な捕獲法が禁止されたのは、濫獲のため川エビの数が急に減少したからである。シワス川のように、川エビがいなくなってしまった川すらもある。さらに漁業省は、繁殖期の川エビを保護するため、1月15日から6月30日まで、禁猟期間を設けている。

カマナーマヘス流域だけでも川エビ採集者、いわゆるカマロネーロ camaronero は3,500ないし4,000人いると言われる。南部3県を合わせたら、1万人前後の採集人がいるだろう。彼らは、平均して1日に2-3キログラム、よいときには4キログラム、少ないときでも1キログラムの川エビを収獲する。カマロネーロは集荷人に、1キログラム200ソル前後で川エビを引きわたす。

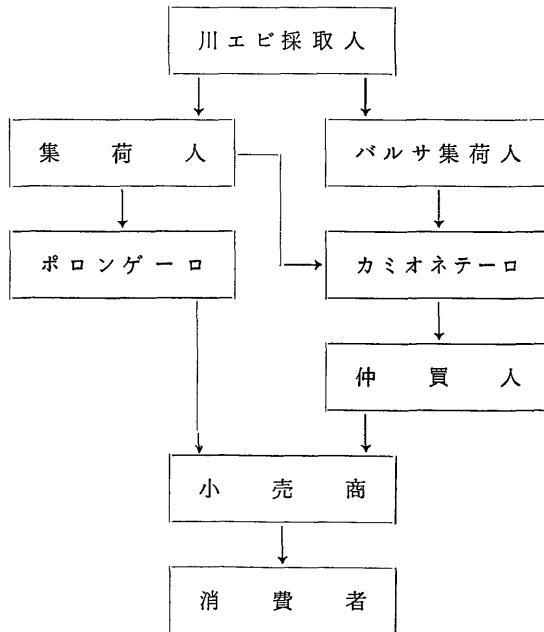
オネルンの報告書によれば、カマナーマヘス川で産出する川エビの70%がリマの市場に、15%がアレキーパの市場に行く。そして10%が捕獲地で消費され、あとの5%がその他の地方に運ばれる。またカマナーマヘスからの出荷が、リマの市場の約60%、アレキーパの市場の約50パーセントを供給し、全国一に立っている [ONERN 1973: 566]。

川エビが捕獲され、商業ルートに乗せられて、消費者の手に入るまでの経路は次の通りである。まず、カマロネーロは、川の両岸に小屋を作って捕獲に従事し、つかまえた川エビを、川の水にひたしたミズガヤ carrizo の大きな籠の中に入れる。こうし

ておくと川エビは約5日間生きているので、かなりの量を集めて集荷人に売ることができる。カマロネーロは各地から季節的に集まって来る人々だが、高地人が多く、プノ県およびアレキパ県の北部山地出身が大半である。

集荷の方法は、大別してふたつある。第1はバルセーロ *balsero* すなわちバルサ集荷人によるものである。バルセーロとは、セルバ地方でとれる木 (*Ochroma* sp.) を組んでバルサ *balsa* すなわちイカダを作り、川を下りながら、カマロネーロから川エビを集める集荷人のことである。バルサはバルセーロの所有でなく、資本を持つ商人のものであり、木材を小型トラックで出発点まで輸送する費用も商人の負担である。バルセーロは、川上でイカダを組み、午前1時ごろから川を下りはじめる。バルセーロはカマロネーロの小屋にひとつひとつ寄って、川エビを計量し、代金を払う。バルセーロはカマロネーロに食料を供給するので、その代金は差引かれる。バルセーロは、10-12時間かかって川を下りながら川エビを集め、商人に引きわたす。商人はカミオネテロ *camionetero* つまり小型トラック所有者とも呼ばれ、川べりでバルセーロから受けとった荷をじぶんの家にある保存所にはこび、氷を入れて2,3日おいてから、500ないし2,500キログラムの荷をまとめて、都会の市場に輸送する。品物は、仲買人の手を経て小売商人に引き渡される。

表1 カマロン（川エビ）の販売経路



集荷の第2の方法は、コピアドール *copiador* すなわち集荷人によるもので、これは第1のものより規模が小さく、馬やラバを用いて川岸を歩き、カマロネーロから川エビを集めるのである。バルサによる方法に比べると能率がわるく、また収入も劣る。コピアドールも品物をカミオネテロに渡す。

カミオネテロの手を経ないで、地方の小さな市場に出荷される分もある。量としては問題にならないくらい少ないが、ポロンゲーロ *poronguero* という小仲買人が、コピアドールから直接品物を買いつけて、小売商に渡すのである。ポロンゲーロという名は、彼らの使う川エビ入れの容器の名 (*porongo*) から来ている (表1)。

以上述べたのは、カマナ-マヘス川流域におけるシステムであるが、他の川でも大体同じようなやり方で捕獲、集荷、出荷がおこなわれているようである。ただし、谷間がけわしくて、バルサによる以外には集荷が困難なようなところ、たとえばオコニャ川流域では、バルセーロ即コピアドールである。オコニャ河口付近の川エビ商人から得た情報によれば、オコニャのコピアドールは、四輪駆動の小型トラックで海拔2,000メートル以上のオコニャ川左岸の高地を越え、中流のイキピ *Iquipi*, ラ・ビクトリア *La Victoria* 付近まで行ってバルサを組み、河口まで約60キロメートルの流れを下りながら、カマロネーロから荷を集めるのだという。

乾燥川エビは、生のまま出荷されるものに比べれば量は少ないが、生産地、または都会の市場で準備され、高地むけに販売される。イキピのインフォーマントによれば、その地のカマロネーロが取った川エビの一部を乾燥化したものを、山から降りて来る人たちが買って行くそうである。

8. 高原の牧民と海岸地方

以上述べてきたのは、すべて高地民たちの海岸地方における活動であったが、その大部分は、農民のカテゴリーに属する人々である。中央アンデスの高地には、農民とともに、リャマ、アルパカを飼育する牧民が住んでいる。垂直統御をおこなう農民の生産圏のいちばん上には、高度4,000メートルをこえるプナがあって、そこに住む牧民は、下の農民の家畜をあずかるとともに、自己の所有する家畜を守って暮している。この牧民は、農民のように定着的な生活をおこなわず、リャマを連れて移動し、ときには何百キロメートルも旅行して、アンデスの山地を横切り、他地方のケチュア地帯に住む農民の村や、海岸の川の流域などに降りて行って、交易をおこなうのである [CONCHA CONTRERAS 1975]。中央アンデスの牧民は、交易商人であった。彼らは、彼らだけの知る小さな山路のネットワークの中を自由にうごきまわり、自己完結的な

農民の村々をつなぐ社会・経済的な役割を演じていた。自動車道路の発達と、流通経済の滲透が、牧民たちのそうした役割を減じつつあることは事実である [CASAVERDE 1977]。しかし彼らは今日伝統的な活動を停止してしまっただけではない。このような牧民が、海岸地方にやってくるかどうか、そしてなにをするのか、というのが、南部3県を調査したときの問題のひとつであった。

牧民がリャマを連れて海岸地方にやってくるためには、ロマス *lomas* の形成が必要である。ガルúa *garúa* という濃い霧が発生し、海岸の丘陵地帯に植物があらわれるとき、山の牧民は家畜を連れて下ってくることができる。ロマスは6月ごろから形成される。このころ山は乾期に入るから、牧民にとっては都合がよい。タクナ県のカプリーナ、サマ、ロクンバなどの川筋では4、5年に1回ロマスが形成され、今でも牧民が家畜とともに来るという。ただし、1977、1978年は異常に乾燥した年で、川の水の涸れたところも多く、ロマスも発達しなかったので、リャマ牧民のすがたは海岸地方では見かけられなかった。したがって以下に述べることは、実際の観察ではなく、海岸地方の住民の証言にもとづいている。

フロレス・オチョアにしたがって、プノ県パラティーア *Paratía* のリャマ、アルパカ牧民の交易活動を表にしてみると、第2表のようになる。彼らは5-7月にアレキーパ、プノ方面に出かけて行って、トウモロコシ、ジャガイモ、大麦などを手に入れる。8-10月にはアレキーパ、プノ、ワンカ *Huanca* 等でトウモロコシ、大麦、小麦、ジャガイモを手に入れる。1-3月にはモケグアに行って、イチゴ、リンゴ、ナシなどを手に入れる。カサベルデによれば、アレキーパ県カイヨーマの牧民は「消費物資を手に入れる唯一の方法」として、物々交換を父祖の時代からおこなってきたという [CASAVERDE 1977: 176]。しかし、近年においては、牧民たちが海岸にもたらずチャルキやチュニョが自動車輸送によって諸都市にはこぼれ、また牧民自身が貨幣経済に参与する度合いが多くなってきたから、彼らの交易活動はむかしほどではない。フロレス・オチョアは、パラティーアの牧民が、今から30年以上前には、ワンカネ *Huancané*、ロサパタ *Rosapata* を通ってボリビアの東部のカマーチョ *Camacho* まで行き、オレンジやココヤトウモロコシを交換によって手に入れたが、今ではもうそのような旅行をしない、と言っている [FLORES OCHOA 1968: 132]。コンチャ・コントレーラスによれば、アプリマック県アンタバンバ *Antabamba* やアイマラエスの牧民は、以前はマヘスやオコニャの流域にまで進出したが、10年ぐらい前から活動が低調になり、コタワシ、チュキバンバあたりまでしか行かなくなったという [CONCHA CONTRERAS 1975: 71]。

表2 リャマ・アルパカ牧民の一年間の活動——プノ県パラティエアの例
 ([FLORES OCHOA 1979] による)

月	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
季節	← 乾 期 →			← 雨 期 →						← 乾 期 →		
牧畜の行事	放牧地	高地での放牧			低いパンパでの放牧			高地での放牧				
	主な仕事				交尾—刈毛			屠殺—チャルキ製造				
	付属した仕事	機おり—糸つむぎ			← 糸つむぎ →			機おり—糸つむぎ				
	居住	カバニーヤ (家族の分散)			エスタンシア (家族の集中)			カバニーヤ (家族の分散)				
	居住地の高度	海拔 4,400m以上			4,400m以下			4,400m以上				
交産物	トウモロコシ	トウモロコシ ジャガイモ	小ムギ 大ムギ				イチジク リンゴ モモ	トウモロコシ ジャガイモ 大ムギ				
交易地	アレキープ	ワンカ市の	アレキープと プノ				モケグア	アレキープと プノ				
販	毛と皮							ランパ, サンタ・ルシア, フリアカ, カバニヤス				
売	鮮肉	モケグア, アレキープ						モケグア				
儀	儀礼	ウィランチャ							パ—ゴ			
式	目的	牧草地						アルパカとリャマの増殖 カルナバル				
カトリックの祭礼			ロサリオの聖母							カルメンの聖母, 聖アントニオ		

牧民たちの交換活動を低下させているもうひとつの原因は、リャマ、アルパカの毛の買付けが、シクアニに本拠をおく商人によって、大々的組織的におこなわれるようになったことによる [ORLOVE 1977]。第2表には、パラティエアの牧民が、3-7月に、ランパ Lampa, サンタ・ルシア Santa Lucía, フリアカ, カバニヤス Cabanillas 等に出かけて羊毛を売ることになっているが、こうした活動は今ではおこなわれない。アプリマック県カライバンパでは、コミュニティを支配するミスティ misti 連中が、プナの牧民に飼育させるリャマの毛を馬やラバに積んで、インディオの馬引き (アリエーロ arriero) に輸送させ、コロコラ, コタワシを通してアレキープまでではるばると旅し、農具や衣類を買っていたという。また彼らは、アリエーロをクスコの東の熱

帯低地に送って、ココヤコーヒーを手に入れ、リャマの毛を刈る時期である雨期に、そのココを持ってプナに上り、牧民に贈っていたという。しかし、この習慣も、10年ほど前、シクアニ商人の進出によって下火になり、ついになくなってしまった（友枝啓泰氏による）。

海岸の方から見て、現在高原の牧民の活動状況はどのようになっているであろうか。

まず、かつては牧民が山から降りて来て、チュニョやチャルキと果物、トウガラシなどと交換していたが、今ではそれが見られなくなった地方がある。北から順に、アカリ、ハキ、タナカ、チャラ、オコニャ川下流、マヘス川、シワス川下流、タンボ川下流、ロクンバ、サマ・グランデなどである。いずれもここ7-10年位の現象であるが、タナカのように、30年以上前から来なくなった、という所もある。

つぎに、今でも牧民が来るという地方だが、上記の川の上流地方には、まだ来るところが多いようである。たとえば、オコニャ川中流のイキピ、シワス川の上流のピタイ、タンボ川上流のオマーテ Omate、モケグアの北のトラタなどでは、牧民のチャルキやチュニョと、イチゴ、トウモロコシ等の交換が今でもおこなわれている。イキピやカラベリでは、1アローバのチャルキと2アローバの乾燥イチゴが交換されることのであった。流通と市場経済の発達している海岸近くには牧民はもう行かないが、すこし山地にはいって交通不便なところでは、まだ物々交換がおこなわれているのである。とくに注目されるのは、峡谷がけわしいため、海岸から自動車道路がはいりこんでいない、オコニャ川中流のイキピ、ウラスキ Urasqui などでは、むかしそのままの状態で伝統的な交易がおこなわれていることである。

第3にあげられるのは、牧民の海岸地方における労働である。これは、コチャユーヨ等の採取と、水田、オリーブ畑等における賃銀労働のふたつに大別される。アグア・サラダで得られた口述資料によれば、ロマスが形成される年には、リャマを連れて牧民がやってきて、谷間にある遺跡の中の、おそらく先史時代の石がこいの中にリャマを入れじぶんたちはコチャユーヨを取るのである。アグア・サラダの定住したコチャユーヨ採取民の狩場に割りこんで葛藤がおこるようなことはないか、という問いにたいして、インフォーマントは、「われわれは岩壁にロープを使って降りて作業する専門家だが、牧民たちはしろうとでそのような危険をおかす勇気はなく、海辺のあぶなくない所でコチャユーヨを取るから衝突はおこらない」と答えた。アグア・サラダの住民と牧民たちはすでに顔見知りになっているようであり、われわれの調査した1978年は乾いた年でロマスが出来なかったが、それでも前に来た牧民がひとり、バスでやって来てコチャユーヨを取って行ったそうである。

チャラでは、牧民が来る、という情報と、前は来たがもう来ない、という相反する情報が得られた。後者は、物々交換に来る牧民がいなくなった、という意味であろう。コンチャ・コントレーラスがアプリマック地方で得た情報によれば、牧民のある者たちは、砂糖や米を手に入れるためにチャラ港まで交易に出かけていたが、自動車でそれらが手にはいるようになったから今では止めてしまったという [CONCHA CONTRERAS 1975: 73]。しかし、コチャニューヨ等の海産物をとりに来る牧民が今でもあることは、たしかなようである。チャラのふたりのインフォーマントによれば、牧民は4,5人でリヤマを連れてやってきて、海岸に近い牧草の生えた丘の上にひとり番を残し、他の者たちは海辺まで降りてコチャニューヨを取るののである。この口述資料は、アティコとオコニャの間にあるラ・ボデーガで得られた証言とも一致する。そこでは、1976年に牧民がやって来て、高台の牧草地にリヤマ群を残し、海岸に出て海草を取ったという。アティコ港でも同様の情報が得られた。アグア・サラダからアティコおよびその先までの地方は、山が海岸に迫り、高い台地状になっているので、今でも牧民が海岸まで接近できるのである。

流通経済の発達にもかかわらず、牧民の交易活動は、現在でもふたつの領域で維持されている。ひとつは、上に述べた、海岸の川の上・中流の流域における交易である。これは、それらの奥まった地方が、まだ比較的市場経済の洗礼をうけておらず、また物々交換が、牧民にとっても、交換相手の農民にとっても利点を持っているから存在理由を失っていないのである。交換の比率は伝統的に定まっておき、市場価格のようにはげしく変動することはない。オコニャのイキピでは1アローバ(約11.5キログラム)のチャルキが2アローバのトウモロコシか小麦と交換される。シワス川上流の例では、3.5アローバの小麦またはトウモロコシが12ないし15キログラムのチャルキまたはチャローナと交換される。すなわち40キログラムあまりの穀類が、12-15キログラムの干肉と交換されるのである。これを単純に市場における価格に換算してみると、いちじるしく不均等な交換である。たとえば1978年11月22日(水)、アレキープ県カマナにおけるトウモロコシ1キログラムの価格は60ソル、それにたいしてチャルキは325ソル、チャローナは340ソルであった。だから、シワスでは3,900ないし4,875ソルのものを、2,400ソルのものと交換し、イキピでは325ソルのものを120ソルのものと交換していることになる。それでも物々交換は、むかしから不変の交換率によっている、という安定性の故に好まれ、だれも市場価格に換算して値切ったりまた逆に値を釣りあげたりはしないのである。もちろん、こういう交換が成立する場所は、幹線自動車道路や大きな市場から遠く離れていなければならない。そういう場所では、市場

価格は実感をともなわぬ抽象的な概念であり、むしろ農民にとってはチュニョやチャルキ、チャローナ、牧民にとってはトウモロコシや果物（乾燥した場合が多い）といった、生活必需物資を、安定した交換率で確実に手に入れることの方が重要なのである。

牧民たちの交易が今なお有効に維持されているもうひとつの領域は、コンチャ・コントレラスがケブラーダ quebrada での交換と呼んだところのものである [CONCHA CONTRERAS 1975: 76]。ケブラーダとは峡谷という意味だが、アンデス高原に開析されている河谷をさし、ユンガまたはケチュアと呼ばれる温暖地である。当然ここは、トウモロコシや小麦などの農耕地になって、農村の数も多い。南ペルーで言えば、アバンカイ Abancay、アンダワイラス Andahuaylas、アンタパンバ、アイマラエスなどがその例である。アレキープ、アヤクーチョ、クスコ、およびアプリマックの諸県の高地から、多くの牧民が集まってくる。カサベルデは、アレキープ県カイヨーマ郡の山地に住む牧民たちが、マヘス川上流のCOLCA川流域のケブラーダに出てきて農民とおこなう交易が、相互補完的な体系をつくっており、牧民と農民の関係はシンメトリカルであって、しばしば顔見知りの関係にあり、相互間に一種の信頼感があって、どちらの側もこの交換を維持しようとする意志が強いことを強調している [CASAVARDE 1977: 176-183]。アプリマック県カライバンバにおいてたしかめられたところによると、上記のように、アリエーロの交易はおこなわれなくなった (pp. 38-39) が、プナに住む牧民の交易は今でも相変わらずおこなわれているようである。すなわち、カライバンバの牧民は、アレキープ県の山地のワルワ Huarhua の塩山の塩や、海岸地方のコチャユエヨ、乾燥イチジクなどを交換によって手に入れ、これらの品物や、じぶんのところで生産するチャルキ、そしてカライバンバの農民から交換によって手に入れたチュニョなどをリヤマに積んで、アバンカイの谷まで降り、そこの農民と交易して、トウモロコシを入手する（友枝啓泰氏による）。

リヤマ、アルパカ牧民は、むかしから中央アンデスの地域間交易の専従者であり、垂直統御の成立に大きな役割をはたしてきた。彼らの活動は、ペルー全土の高地と海岸を結びつけていたと想像されるが、スペイン人の征服後の変化と、共和国独立後の情勢により、中・北部の海岸では大農園農業が発達をとげて同地方に流通経済がすすみ、また一方ではリヤマの数が減少して、現在フニン Junín 以北ではほとんど見られなくなってしまったような状況である。それに反して、アヤクーチョ県から南の諸県においては、今なお牧民がたくさんリヤマ、アルパカを飼い、ケブラーダや海岸地方の農民と交易をおこなって 地域間の交流と統合に役割をはたしている。以上の考

察は、牧民の交易の経済的、物質的側面だけを問題にしてきたが、彼らが農民社会と結ぶ社会関係についても今後研究することが必要であろう。

文 献

- ACLETO O., César
 1971 *Algas marinas del Perú de importancia económica*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Museo de Historia Natural "Javier Prado", Departamento de Botánica, Serie de Divulgación, No. 5.
 1973 *Las algas marinas del Perú*. Boletín de la Sociedad Peruana de Botánica, VI.
- ACLETO, César y Jorge A. ENDO
 1977 Las especies peruanas de PORPHYRA (Rhodophyta, Bangiales), I. Taxonomía y distribución geográfica. *Publicaciones del Museo de Historia Natural "Javier Prado"*, Botánica Serie B, No. 29. Lima.
- ALDAVE PAJARES, Augusto
 1969 Cushuro. Algas azul-verdes utilizadas como alimento en la región alto andina peruana. *Boletín de la Sociedad Botánica de La Libertad*, Vol. 1, no. 2. Trujillo.
- ANTUNEZ DE MAYOLO R., Santiago
 1978 La alimentación en el Tawantinsuyu. In Koth de Paredes, Marcia y Amalia Castelli (eds.), *Etnohistoria y antropología andina*, Lima, pp. 277-298.
- BRUSH, Stephen B.
 1977 *Mountain, Field, and Family: The Economy and Human Ecology of an Andean Valley*. University of Pennsylvania Press.
- CASAVARDE R., Juvenal
 1977 El trueque en la economía pastoril. In Jorge A. Flores Ochoa (ed.), *Pastores de puna*, Lima, pp. 171-191.
- COBO, Bernabe
 1956 (1653) *Historia del Nuevo Mundo*. Obras del P. Bernabe Cobo. Biblioteca de Autores Españoles, tomos 91-92. Madrid.
- CONCHA CONTRERAS, Juan de Dios
 1975 Relación entre pastores y agricultores. *Allpanchis Phuturinga* 8: 67-101.
- CUADROS, Juan José
 1977 Informe etnográfico de Collaguas (1974-1975). In F. Pease (ed.), *Collaguas I*. Lima, pp. 35-52.
- DIEZ DE SAN MIGUEL, Garci
 1964 (1567) *Visita hecha a la Provincia de Chucuito*. Lima.
- FLORES OCHOA, Jorge A.
 1968 *Los pastores de Paratía*. México.
 1973 El reino Lupaca y el actual control vertical de la ecología. *Historia y Cultura* 6: 195-201.
 1978 Organización social y complementariedad económica en los Andes Centrales. *Actes du XLII Congrès International des Américanistes* Vol. IV: 9-18.
 1979 *Pastoralists of the Andes*. R. Bolton, trans. Philadelphia.
- FORMAN, Sylvia Helen
 1978 The Future Value of the "Verticality" Concept: Implications and Possible Applications in the Andes. *Actes du XLII Congrès International des Américanistes* Vol. IV: 233-256.
- GADE, Daniel W.
 1975 *Plants, Man and the Land in the Vilcanota Valley of Peru*. Biogeographica 6. The Hague.
- HÖRKHEIMER, Hans
 1973 *Alimentación y obtención de alimentos en el Perú Prehispánico*. Lima.

- JELICIC, Jorge
1978 *La reforma agraria y la ganadería lechera en el Perú*. Lima.
- KIRCHHOFF, Paul
1952 Mesoamerica: Its Geographic Limits, Ethnic Composition and Cultural Characteristics. In Sol Tax & Others (eds.), *Heritage of Conquest*, pp. 17-39.
- ΚΟΕΡΚΚΕ, H. W. y M.
1968 *División ecológica de la costa peruana*. Lima.
- MOSELEY, Michael E.
1975 *The Maritime Foundation of Andean Civilization*. Menlo Park.
- MURRA, John V.
1968 An Aymara Kingdom in 1567. *Ethnohistory* 15: 115-151.
1975 El control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In Murra, *Formaciones económicas y políticas del mundo andino*. Lima, pp. 59-115.
- ONERN
1973 *Inventario, evaluación y uso racional de los recursos naturales de la costa. Cuenca del Río Camaná-Majes*, Vol. II. Informe, anexos y mapas. Lima.
- 大貫良夫
1978a 「アンデス高地の環境利用——垂直統御をめぐる問題」『国立民族学博物館研究報告』3(4): 710-733。
1978b 「ペルー南部民族学調査覚書」『リトルワールド年報』1: 1-17。
- ORLOVE, Benjamin S.
1977 *Alpacas, Sheep, and Men*. New York.
- ORTIZ DE ZUÑIGA, Iñigo
1967-1972 (1562) *Visita de la Provincia de León de Huánuco*. Huánuco.
- PEASE, Franklin
1977 Collaguas: una etnia del siglo XVI. Problemas iniciales. In F. Pease (ed.), *Collaguas* 1. Lima, pp. 131-167.
- PEASE, Franklin (ed.)
1977 *Collaguas* 1. Lima.
- PULGAR VIDAL, Javier
1946 *Las ocho regiones naturales del Perú*. Lima.
- SANCHEZ ROMERO, Jorge
1977 Aspectos biológicos y pesqueros del mar peruano. *Historia marítima del Perú*, Tomo I, Vol. 2. Lima.
- 佐藤 久
1979 「アンデス山脈の形成」『地理』8: 9-20。
- SCHWEIGGER, Erwin
1943 *Pesquería y oceanografía del Perú y proposiciones para su desarrollo futuro*. Lima.
1964 *El litoral peruano*. 2a edición. Lima.
- TOSI, Joseph
1960 *Zonas de vida natural en el Perú*. Lima.
- TROLL, Carl
1958 *Las culturas superiores andinas y el medio geográfico*. Lima.
- VALDIVIA, Oscar
1978 Entrevista al Ing. Oscar Valdivia sobre el Proyecto Majes. *Urbanismo y planificación* 25: 9-13.